第 5 回 宗教と環境シンポジウム報告書
2015 年（平成 27）3 月 15 日

第 5 回 宗教と環境シンポジウム――変えようくらし、守ろう地球
―― いのちを活かしあう新たな文明原理の探求と実践――

竹村 牧男　東洋大学 学長

藤田 光寛　高野山大学 学長

松長 有慶　高野山真言宗管長 総本山金剛峯寺座主

北川 宥智　高野山真言宗高家寺住職／環境省登録環境カウンセラー

小原 克博　同志社大学 神学部教授

金子　昭　天理大学 おやさと研究所教授

村田 充八　阪南大学 国際コミュニケーション学部教授

山本 良一　東京大学 名誉教授

主催：宗教・研究者エコイニシアティブ（RSE）
共催：東洋大学 国際哲学研究センター（IRCP）
後援：高野山大学
（2014 年［平成 26］ 10 月 25 日　於 高野山大学 松下講堂黎明館）

目　　次

開会ご挨拶　宗教・研究者エコイニシアティブ代表　竹村 牧男　… 3

会場校ご挨拶　高野山大学 学長　藤田 光寛　… 5

Ⅰ　基調講演　環境問題について－仏教の視点から－
高野山真言宗管長 総本山金剛峯寺座主　松長 有慶　… 6

Ⅱ　パネル発表１　地球環境の根本問題解決に向け、宗教者にしかできないこと
高野山真言宗高家寺住職／環境省登録環境カウンセラー
北川 宥智　…12

パネル発表２　環境文化と物語――文明論的視点から見た宗教の役割
同志社大学 神学部教授　小原 克博　…16

パネル発表３　いのちの危機とその回復
――21 世紀における生命の畏敬の倫理再考
天理大学 おやさと研究所教授　金子　昭　…20

Ⅲ　パネルディスカッション ―いのちを活かしあう新たな文明原理の探求と実践―
パネル発表者
（モデレータ）　阪南大学 国際コミュニケーション学部教授　村田 充八　…24

閉会ご挨拶　宗教・研究者エコイニシアティブ副代表　山本良一　…30

宗教・研究者エコイニシアティブ第５回シンポジウム 宣言　…32

Summary　…34

第４回宗教と環境シンポジウム

開　会　ご　挨　拶

宗教・研究者エコイニシアティブ
代表　竹村牧男（東洋大学学長）

ご来場の皆様こんにちは。本日は都会の喧騒から離れ、高野山にお集まり下さり誠にありがとうございます。心より御礼申し上げます。また高野山金剛峯寺の御座主であられます松長有慶猊下には、お忙しい中、今回の基調講演をお引き受け下さり、こうしてお出ましを賜っております。厚く御礼申し上げます。さらに高野山大学には会場の貸出し、その他種々ご協力を賜り深く感謝申し上げます。本日は、これから私ども宗教・研究者エコイニシアティブと高野山大学との共催で、環境問題に関するシンポジウムを開催させて戴きます。

さて、私ども宗教・研究者エコイニシアティブは、宗教者と、宗教分野あるいは環境分野の研究者が共に環境問題を考える任意団体です。なぜ宗教者が環境問題に関わるのかといえば、宗教は私たちに恵まれている「いのち」を大切にしますが、環境問題はそのいのちを損ねるものだからです。環境問題が近年いかに深刻になっているか、このことについては皆様も肌で感じておられるところでしょう。また多くの科学者が世界中で警鐘を鳴らしており、その問題性は明らかであると思われます。いのちの大切さに敏感な私たち宗教者としては、このことを見逃すわけにはいきません。いのちを深い地平から活かし霊性の働きを十全に発揮させることを旨とする宗教は、この深刻な問題の解決に真摯に取り組んでいくべきであると考えます。その意味で、いのちを根源的に見つめるここ高野山において、こうしたシンポジウムを開催いたしますのは大きな意味があると思っています。

私ども宗教・研究者エコイニシアティブは、宗教者と研究者とが自身の宗教的立場に固執することなく、他者の宗教的立場にも開かれた心で参加し、相互に協力・連携する組織です。目的とするのは、人と自然の調和を実現するための新しい文明原理を構築して、さらにその原理に沿った各種の具体的実践に踏み出すことであり、現代の環境危機を克服し、地球環境の汚染と破壊を完全に治癒し、地球社会の確かなサステナビリティを実現することを長期的目標としています。

また、そのために、

1. 同世代における人間同士の共生と公正
2. 世代間における人間同士の共生と公正
3. 人間と自然、すなわち環境および多様な命との共生と公正

の３つの共生と公正を実現することを目指しています。

これらのことを踏まえ、地球社会を主導してきた従来の文明原理に潜む諸問題を分析・究明し、未来の理想的な地球社会へと導く新たな文明原理を宗教に共通する人間観・世界観の中から構築したいと活動してきました。また新たな文明原理を構築するのみならず、その文明原理を先取りした、しかも宗教性に裏付けられた具体的な活動を実際に推進し、宗教界全体と一般市民に私たちのフィロソフィを浸透させていきたいと望んでいます。さらにそのことを通じて、広範な市民のライフスタイルに変革をもたらし、地球社会のサステナビリティが確立されていくことに期待しています。

具体的には、その新しい文明原理を先取りした社会的実践として、太陽光の利用を中心とする再生可能なエネルギー源活用により、エネルギー問題の解決へ向けた提言行動に取り組んできました。いま広く宗教界にこの運動への参加を呼び掛けています。とくに真言密教が明かす大日如来は、まさにこの太陽エネルギーの恵みの根源ではないでしょうか。さらに日本の鎮守の森や寺院境内の林等の保全に発して、国内外の国土の緑の回復・拡充に取り組んでいます。あわせて環境に関する他の様々な諸問題の具体的な改善に積極的に関与し、緑豊かで清浄な自然の形成を目指しております。

こうした私たちの活動をご理解戴き、皆様からの積極的なご参加とご支援を賜りたいと思います。本日のシンポジウムは私どもの活動において第5回となります。松長有慶猊下のお話を楽しみにしてまいります。さらに様々な宗教のお立場からの発表も、貴重な教訓を戴く好機と存じます。タイトルは「変えようくらし、守ろう地球――いのちを活かしあう新たな文明原理の探求と実践――」です。このタイトルには、実践が大事だという訴えが込められています。ここ高野山で行われます本日のシンポジウムが、今後の地球社会にとってきっと有意義なものになると信じます。

なお、シンポジウムが第5回を迎えたことを記念しまして、最後に大会宣言を採択したいと思っています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上、はなはだ簡単ではございますが、開会の挨拶とさせて戴きます。どうもありがとうございました。(拍手)

会 場 校 ご 挨 拶

高野山大学 学長　藤田光寛

第5回宗教と環境シンポジウムの開催にあたり、会場校から一言ご挨拶申し上げます。皆様ようこそお越し下さいました。心から歓迎いたします。今回のシンポジウムのテーマは、「変えようくらし、守ろう地球」――いのちを活かしあう新たな文明原理の探求と実践――です。

この会場のある高野山や弘法大師については、すでに殆どの方がご存じかと思います。しかし今回のシンポジウムをご縁として少しお話しをさせて戴きます。

今から1200年前、弘法大師によって真言密教の根本道場として開かれたのが、この高野山です。その開創1200年にあたる来年、すなわち平成27年の春、4月2日から5月21日までの50日間に亘り、開創法会が執り行われる予定です。

さて、私ども高野山大学は、今年で創立128年目を迎えました。日本が近代国家としてスタートし、学校制度が整備された明治19年から数えても、ちょうど128年目になります。しかし、高野山上にある教育機関としましては、弘法大師がここに真言道場を開き、勉学修行の機関を設置されましたので、それから数え平安時代から今日まで、1200年の歴史と伝統を担っているといって過言ではありません。われわれはそういう自負を持って学んでおります。

本学はこの弘法大師の方針に基づき、「いのち」の営みを尊び、人間の環境・文化を理解し、人間性豊かで創造性に溢れた人材を育成することを目的とし、その教育理念のもと今日に至りました。とくに人間や動物・植物など全てのいのちは、法身大日如来のいのちの現れの一部であると考えています。このお話はあとで松長管長先生から基調講演で詳しくお話し戴けると思います。全てのいのちが平等であり、大日如来のいのちの尊厳を分かち持っているというわけです。われわれはこの学びの上に立ち、世界諸民族の異なる文化を理解し、人間と環境との共生を図り、21世紀の社会に貢献しうる、いのちを活かす人間性豊かな人材を育てることに邁進してまいりました。このような高野山大学で、今回の第5回宗教と環境シンポジウムが開催されますことを大変光栄に思っています。

わが国の現実に目を転じますと、バブル経済の崩壊後、先行き不透明な閉塞感が漂っている不安な状況が長く続いています。その中、さらに平成23年3月11日には、未曾有の規模の東日本大震災が発生しました。現在の科学技術では制御できない自然の力の猛威を再認識させられたわけです。今や日本の社会、経済のシステム全体の大転換、人々の生活の有様や価値観、世界観が根本的転換を迫られています。そして、地球温暖化をはじめとする環境の諸問題につきましても、自然科学、社会科学の両分野から一層真摯な取り組みが求められています。そうした意味で、とくに宗教者のわれわれも勉強して理解し、各人の立場で分相応に行動することが求められているのは明白です。このようなときに当たり、仏都の名にふさわしい文化、歴史、伝統と自然に恵まれたこの高野山で、宗教の分野からの取り組みとして第5回宗教と環境シンポジウムを開催できますことは誠に時宜に適ったことだと思います。本日は午後の短時間ではありますが、斯界の実績ある先生方をお招きしました。ともに大いに学びたいと存じます。

また、これはお願いになりますが、とりわけ環境をテーマとするシンポジウムでありますから、ご参加のみなさまにはぜひ奥の院のほうから壇上伽藍、金剛峯寺、霊宝館など高野山の各所にも足を伸ばされ、森林の聖地であります高野山の空気を胸いっぱい吸いこみ自然体験をして戴ければ嬉しく存じます。会場校といたしましては、不行き届きな点が多々あろうかと思いますが、精一杯努めさせて戴きますので、どうぞ本シンポジウムが実り多いものとなりますように願いまして、簡単でございますが、歓迎のご挨拶に代えさせて戴きます。どうもありがとうございました。（拍手）

第４回宗教と環境シンポジウム　基調講演

環境問題について――仏教の視点から――

高野山真言宗管長 総本山金剛峯寺座主　松長有慶

はじめに

ご紹介戴きました松長有慶です。よろしくお願いします。さて、ただいまの藤田学長の歓迎挨拶にもありましたが、弘法大師の教えは“いのち”の問題と非常につながりが深いと思っております。私たちは宗教者として“いのち”と環境の問題を世論の先頭に立って実践に導いていくべきだと考え、私自身もいろいろな機会に発表してきました。さらに数年前から竹村牧男先生の「共生」や「新たな文明原理」といった問題意識に触発され、考えさせられると同時に、問題意識をもつ先生方ともお話しする機会に恵まれてきました。また、山本良一先生からは「宗教者がしっかりしろ」という叱咤激励を戴いております。そうしたこともあり、実際問題に対してリードしていく責任を感じております。

宗教・研究者エコイニシアティブの今年度の研究会として高野山で第５回目の宗教と環境シンポジウムが開かれる機会をとらえ、基調講演というのもおこがましいですが、今までの仏教からの環境問題へのアプローチを一度整理しておく必要があると考え、お話しさせてもらうことにしました。最後の結論の辺りは、時間をどのくらい残せるのか私自身も予測がつきませんが、流れに任せてこの問題を私なりにまとめたいと思います。なお、お手元にアウトラインをプリントしてお配りしました。仏典には難しい言葉や文字が使われていますので、ご理解のため用意させていただいたものです。

Ⅰ　神――人――世界

さて、宗教とりわけ仏教を通じて環境問題を考えるとき、仏教に内在する“いのち”という事柄への理解をどう捉えるか、その入り口として私は、神・人・世界という３つのキーワードを使って一度考えることにしています。ご承知の通りユダヤ・キリスト教の世界、すなわち西洋文明の基盤には神があり、神が人間をお創りになり、そして人間のために動物・植物をお創りになったという、“いのち”についての縦系列の関係が考えられています。さらに神と人・世界の間には、厳然たる垣根があるというのは皆様も十分ご承知だろうと思います。一方それに対し、アジアの文化の中では、神・人・世界が並列的といいますか、縦関係ではなく横関係に連続し、あるいは同一関係または内在関係になっているのが基本的な視点でしょう。そこで、仏教はどのような基準で“いのち”を理解し、神・人・世界の処理をしてきたのかが問われることになります。

Ⅱ　一切衆生

これまで仏教で環境問題をあつかう時には、一切衆生という言葉がキーワードとしてよく出てまいります。その衆生の中に動物・植物を入れるか、あるいは石ころのような無生物までも衆生に含めるかという問題は、仏教を受容した文化圏によって違いがあります。それらについて一度整理しておく必要があると私は考えています。

いま、仏教の立場から環境問題を論じるときのキーワードは一切衆生だと申しました。この一切衆生という言葉は、プリントにもありますようにサンスクリット語では sarva- sattva（サルヴァ サットヴァ）です。そして、この sarva は一切という意味ですから、これは一応除いてもよいわけです。一方、sattva という言葉はサンスクリットの動詞の as というルートから構成された名詞で、もともと存在するものという意味です。そして sattva、すなわちサンスクリットの「存在するもの」という言葉が漢訳されたときに、衆生という言葉になるわけです。

漢訳仏典は、翻訳年代により新訳と旧訳とに分けられますが、7 世紀の玄奘の翻訳からは新訳とされます。そして新訳になりますと衆生といわず、有情という言葉に訳されました。これは情（意識）を持つという意味ですが、仏教では“いのち”を持つものという意味に使われる言葉です。それに対して非情という言葉があります。これは“いのち”を持たないものという使用法です。ですから有情、すなわち“いのち”あるものに関しては問題がないわけですが、非情としたものが動物、植物、あるいは石ころまで含めるかという問題では、境界線が文化によって動くことになります。その問題についてこれから簡単にご説明したいと思います。

Ⅲ 衆生の範囲

まずアウトラインとして、衆生の範囲をどこまで広げるかという問題についてまとめてみます。本来のインド仏教では、有情は人間だけです。つまり動物、植物は、みな非情という範疇に入ります。

ただし、インド哲学専門のシュミットハウゼン博士（Lambert Schmithausen　ハンブルク大学名誉教授）が非常に早くから環境問題についても発言しております。20 年ほど前に日本で講演会をしたことがあり、彼はベジタリアンです。今回確認してはおりませんが、シュミットハウゼン博士はインドでは動物、植物もみな生き物として認めていると発言されています。このことは、「自然」という雑誌に発表されていると、岡田真美子氏（兵庫県立大学・環境人間学部教授）の論文 ⑴ からの「孫引き」ですが、そのように言っているようです。これは後にも少し関連してくるかもしれませんので、ここではそれだけ申し上げておきます。

次に中国ではどう言っているかというと、仏教に先立ち『荘子』と『礼記』の中に衆生という言葉がもともとありました。sattva というサンスクリット語が仏教とともに入ってきたとき、それに従来あった衆生という言葉をあてたのです。しかし、その意味範囲には草木や瓦石は含まれないと中国哲学者の福永光司氏（京都大学名誉教授）が言っておられます ⑵ 。これも私自身が細かく文献を調べたわけではなく、「孫引き」ですが、だいたい中国人はこのように考えてきたようです。これに対し日本では、動物、植物に対しても、さらに石ころにまで“いのち”を認める文化を持っています。そういう形に転換している。アウトラインとして、そうした流れであるとご理解ください。

Ⅳ ヴェーダの宗教、ヒンドゥー教

さて、インドからもう一度この問題について概観してみます。ヴェーダの宗教、それからヒンドゥー教についてです。ヴェーダの宗教は、昔はバラモン教と呼ばれていましたが、最近はヴェーダの宗教という言い方をするようになりました。ヒンドゥー教と似ているようですが、宗教の形態としてはかなり違っております。ヴェーダの時代にはアグニとかヴァーユとかヴァルナ、これは順に火の神、風の神、水の神ですが、それらの人格神が立てられ、あちこちにいるそれら諸神に対し儀礼を行うということになっていました。少し時代が降ってウパニシャッドの時代になりますと、かなり哲学的な思索がここに入り、ブラフマンという宇宙我が想定されました。こちらはユダヤ・キリスト教のような創造神・主宰神ではなく、むしろ絶対の存在ではありながら、万物に内在する構造を持った宇宙我・ブラフマンであるとする考えです。これは関連するアグニやヴァーユやヴァルナといった人格神ではなく、宇宙的に遍満する存在ということになります。このブラフマンに対し、人とか世界というかわりにアートマン（個我）、すなわち現実の存在が立てられます。そしてこれがご承知のように梵我一如（ぼんがいちにょ）という言葉の通り、ブラフマンとアートマンとは本源的には一つだという哲学的理論に展開していくわけです。したがってブラフマンは人格神ではなく、中性原理で表現されることになります。なおブラフマンは、もう少し時代が遅れると仏教以後には人格神のブラフマー（梵天）として表現されています。

それでは、このブラフマーは、ブラフマンという宇宙我と現実世界に存在するものとどのような関係を持つかということになります。仏教以前の古いウパニシャッドである『タイッティーリヤ・ウパニシャッド』（3.1.1）に遡りますと、その中でブラフマンというのは食物、息、目、耳、心、言葉であるとされます。ブラフマンからこれらの生物が生まれ、それによって生物が生き、そこに還っていくという、やはり根源的な宇宙我というものです。そこに現実に存在するものはブラフマンであると同時に、そういうもの全部が、生まれるのも還るのもブラフマンであるといいます。そのように現象世界の一々に内在していく原理がブラフマンであり、ブラフマンは創造ではなく内在する存在なのだということです。これは一つの代表として出てきます。

それに対してヒンドゥー教の時代、2 世紀以後になりますと、新しい展開があります。一例を挙げますと、『バガヴァッド・ギーター』（4.24）の中に「儀礼の用具はブラフマンである、供物はブラフマンである。ブラフマンである火のなかに、ブラフマンによって注がれる」。こういう「儀礼の用具はブラフマンである」という形で、石ころの世界といいますか、無機物がブラフマンだという表現が出てきます。先のシュミットハウゼン博士は、こうしたことに依拠しインド人は一般的な世界の無機質なものに“いのち”があると考えた、と指摘したのかもしれません。このようなインドの文献はたくさんあり、例外もありますけれど、それらによってヴェーダの時代からウパニシャッドの時代を経て、ヒンドゥー教の時代になってくると、かなりものに対する考え方が変わってきていると分かります。

Ⅴ インド仏教

次は仏教の話です。ご承知の通り、釈尊の時代、初期の仏教では超越的神格というものを認めていません。一切は縁起によって出来上がっているという基本的な考え方です。つまり創造主や超越的人格は認められません。しかし大乗仏教になってきますと、一切衆生悉有仏性という有名な『涅槃経』の言葉が出てきます。しかしこの場合の衆生は意識ある生物に限られているということです。

『大般涅槃経』 ⑶ に、一切衆生悉有仏性とありますが、その次の言葉に注目します。

「非仏性者　所謂一切牆壁瓦石無情之物　離如是無情之物　是名仏性（仏性にあらざるは、いわゆる一切の牆壁、瓦石、無情の物。かくの如く無情の物を離れるを仏性と名づく）」

いわゆる一切の壁土や石ころのような“いのち”のないもの以外のものに仏性があるのだ、という考え方です。ですから石ころには“いのち”がないという考え方です。これがあとで日本に来ると変わってきますが、それはそのときに申し上げます。これが『大般涅槃経』の一切衆生悉有仏性という言葉が説かれている箇所です。

また、仏教に三種世間という言葉があります。これは智儼の『華厳孔目章』巻３の中に出ている言葉で、１は智正覚世間、２は衆生世間、３は器世間で三種世間となります。

智正覚世間というのは仏のことです。衆生世間は人のことです。器世間は３つのキーワードのなかの世間です。私が最初に掲げた３つのキーワード、すなわち、神・人・世界を思い出してください。この智正覚世間、衆生世間、器世間がその３つのキーワードに当たると考えてもよいと思います。

中国文化では、これに対応するのが天、地、人という３つの分け方です。プリントでは天、人、地と配列が変わっています。これは『華厳経』の注釈ですからインドではなくて中国ではないかと考えられる方がおられるかもしれません。そこで、般若訳の『諸仏境界摂真実経』をご覧下さい。これは真言宗で大事にする『金剛頂経』の古い形の漢訳経典です。この中に「九方の無量の世界を諸仏菩薩と、一切衆生と、山川草木が咸（みな）青色であると観ぜよ」⑷ という文章があります。この三種世間という言葉は文献としては中国しか出てきませんが、三種のカテゴリーに分類することはインド起源の思想と考えてよいと思います。『諸仏境界摂真実経』の中に諸仏菩薩と一切衆生と山川草木という形で出てくることから考えますと、その三種世間はインド的な捉え方であるとも見られます。そこでインド仏教に入れたわけです。

Ⅵ 中国仏教

次に中国仏教になります。ここでは意外に衆生が成仏するかしないかを大いに問題としています。それは“いのち”があるかないかという問題と繋がってくるからです。ではその有情というものは、どこに境界線があるか。インド仏教のように人間に限るか、あるいは動物、植物に及ぶか、さらに石ころにまで及ぶかという問題になってきます。中国仏教では最初、インド仏教以来の非情不成仏説を継承し、“いのち”のないものは成仏しないとします。だから石ころは不成仏としています。しかし７世紀初めの吉蔵の『大乗玄論』には、草木成仏が出てきます。有情の中に植物を含めるという考え方が中国文献の中に出てきたのです。

さらに、荊渓湛然という方は『金剛錍』という書物を著して、「草木石人に仏性あり」とします。つまり石ころにも仏性があると展開しているのです。中国仏教では、インド仏教とはかなり違って石ころまでも“いのち”を認めるという考えに展開していきます。

ダライラマ（14 世）が日本に再々おいでになり、私もたびたびお会いしています。数年前に四国でゆっくり膝を突き合わせて話をする機会がありました。両方とも同じような密教を基盤としていますので話がずいぶん合うのですが、一つだけどうしても承諾してもらえなかったことがあります。それは何かといえば、私は石ころにも“いのち”があると申しますと、「石ころに“いのち”なんかあるものか」ということで、そこで話が終わってしまいました。去年（平成 25 年）日本に来られて一緒に昼ご飯を食べている時に、「あなたが前に言っていた、石ころに“いのち”があるというのは神道の考え方だな」というような話をされました。その間に勉強されたのかと思いました。というのはやはりダライラマはインドの正統仏教を自分が継いでいる意識が非常に強い方です。石ころに“いのち”があるということは絶対認めないというのがインド仏教の基本的な立場ですから、やはりそれは当然であるわけです。石ころに“いのち”を認めるということは日本人の考え方ということになるかもしれません。それは神道の考えだ、という話をされたのが印象的でした。

Ⅶ 日本仏教

Ａ　最澄

日本仏教に移ります。日本仏教ではどのように考えるか。最澄（伝教大師）に『守護国界章』 ⑸ という代表

的な長編の著作があります。この中に『涅槃経』で「一切衆生は悉く仏性あり、およそ心ある者は悉く菩提を得べしと云う」とあります。これはさきほどの『大般涅槃経』の言葉を引いているわけです。面白いのはその次です。「非仏性とは牆壁瓦礫無情の物を云う。此の教理に依るに一切悉皆仏種性あり、皆当に成仏すべし」と、同じ『涅槃経』の言葉を引いています。最澄はこの『涅槃経』の言葉を引いて、一か所だけ変えています。「かくの如く無情の物を離る」という所から「離る」という言葉を取ってしまいました。離れるから石ころかどには仏性がない、と言っているところを最澄は「離る」という否定詞を抜いてしまい、これで肯定的にあらゆるものに仏性ありの典拠を『涅槃経』に持ってきたのです。これは意図的だと思います。こういった形で最澄は石ころに“いのち”があるということを認めていることが『守護国界章』の記述からも分かります。

B　安然

同じ天台宗の安然は、最澄から一世紀ほど後になります。安然は天台宗の方でありながらかなり密教にも精通されていて、密教的な考え方をされる方です。この方には『斟定草木成仏私記』があります。末木文美士氏（総合研究大学院大学 文化科学研究科教授）の『平安初期仏教思想の研究』にいろいろ書いてありますが、第五章に「草木成仏論」(6) があります。そこで末木氏は「草木が成仏することを前提とした上で、成仏のあり方、特に草木が自ら発心修行成仏するかという点に絞り込んで問題にしていく」と言っています。だから“いのち”があるかないかという問題より、草木が成仏するなら、どういう形でそれが修行していくのだということに問題意識があると切り込んでおられます。

安然にはまた『菩提心義抄』という書物があります。この書物の第二にある第一問答のところに「器世間にも三力が備わっていて成仏しうる」(7) とあります。器世間というのは最初に述べました三種世間の中の石ころの世界のことです。これが成仏することができると明確に述べています。ですからこれも有情、非情の世界、人の世界だけでなく、普通の石ころの世界まで広げていると分かります。

C　空海

一方、同じ平安仏教でも空海（弘法大師）はどうか。『吽字義』という書物の中に「草木また成ず、いかに況や有情をや」(8) と書いてあります。「草木に仏無くんば、波に則ち湿無けん」(9) とあります。空海の著作の中で、この問題に関連するのはこれだけなのです。だから空海の場合は、いわゆる中国由来の草木成仏説をそのまま継承していると私は思います。つまり草木までを“いのち”あるものと認めるということになります。

なお、空海にはその他に「願文」というものがあります。法事をしたり仏像を作ったり曼荼羅を描いたりといった功徳ある行いをしたとき、その功徳をどこに巡らすかということが趣意として願文に記されます。これは 40 種類ほど現在まで残っています。そのうち半数以上の願文には、最後に功徳ある行いを通して、生きとし生けるものがみんな成仏してほしいと繰り返し出てきます。それは動物、植物を含めて成仏を祈るということです。動物、植物までの成仏ということが意識としてあるのだろうと思います。

さて、ここまでの説明は仏教の中で有情（衆生）の範囲をどこまで広げるのか、“いのち”あるものをどこまで認めるかという議論をたどってきたものです。資料には線を引いてありますが、その次に六大体大の考え方を提示しました。これは今までの草木成仏論、あるいは石ころの成仏論とは質の違う考え方です。

六大体大は空海の著作になる『即身成仏義』(10) の著作の中にある考え方で、「地、水、火、風、空」というのは五大、物質原理です。それに対して「識」大は精神原理です。宇宙そのもの、世界そのものを六大という形で物質原理と精神原理、そしてそれらが本来は一体なのだという思想が『即身成仏義』に強く打ち出されています。

ところで、この原理は次のようによく間違えられます。それはこの即身成仏の五大を、要素だと考えることです。要素だと説明しやすいのです。土の要素、水の要素、火の要素、風の要素、空の要素と考える。あるいはそれに対して精神の要素。しかし、これが一体ではないのです。説明しやすいのですが、よく間違います。五大ないし六大の大とは、いわゆる element ではありません。もしそのように五つの物質的な元素と精神的な元素が一つになるというのであれば、これはインドの積聚説で、インドでもギリシア哲学でも元々そういう考え方があります。要素がいろいろ集まって世界ができるという考えです。そうではなくて一つの宇宙の中でそれら地、水、火、風、空というシンボルとしてあるという考え方です。五種の物質的なシンボルと精神的なシンボルとは一体化しているという考え方です。これは理解が少し難しいかもしれません。

この喩えが適切であるか分かりませんが、私はよく次のように説明しています。赤ちゃんが生まれたとき、この子の目は父方のおじいさんに似ている、この子の鼻はおばあさんに似ている、口はお母さんのケースだ、耳の

形はお父さんそっくりだ等と言います。しかし赤ん坊は、そういうおばあさんの鼻とおじいさんの目をそれぞれ組み合わせたわけではないのです。一つの全体の中にそういういろいろな原理が含まれているといった説明をしたほうがこの六大は説明しやすいのではないかと感じます。要素ではありません。要素でしたらおばあさんの鼻とおじいさんの耳をくっつけるという話になります。そういった一つの宇宙という全体性の中で、こういうものが根底で一体となっているという哲学を空海が新しく作り上げているわけです。基本的なインド思想のウパニシャッド辺りで哲学化された、今までの一般的な信仰とか考え方を哲学化したように、空海は物と心の世界の一体説を理論化して六大体大説を作り上げております。

ですから今までの有情が成仏するかどうか、石ころまで“いのち”があるかどうかという問題とは少し質の違う立て方になりますが、やはり物質という“もの”をどのように考えるかという点では一つの哲学説です。空海自身の成仏論としては草木成仏までしか述べていませんが、こういう哲学的展開という形からは、やはり少し違った問題が出てくるのではないかと思います。以上のように有情、無常、一切衆生悉有仏性という一つの線で仏教の環境問題としての多くの方が辿ってきたわけです。

Ⅷ いかに対処すべきか

A 日本人の感覚

さてそれでは、ここからどう対処するかという問題になってまいります。これは草や木に“いのち”があるか、石ころに“いのち”があるかという問題だけではなく、日本人の精神性あるいは心情的な特徴を考えることが一つのポイントになるでしょう。そもそも日本人は、あらゆるものには目に見えない“いのち”が潜んでいるという感覚を持っています。これは理論の問題でなく、感覚的にものには“いのち”があると考え、または感じるということです。このことは環境の問題解決の中でもやはり大事にしたい態度であり、思想的な展開というよりも、日本人の感覚的な特徴といえます。

よく私がする説明ですが、日本語の“もの”というのは、物と者の二つの意味を含んでいます。つまり“もの”という言葉一つに、“物質”と“いのちのある者”という二通りの含意があります。これはやはり哲学ではなく、日本人の感覚の中では“もの”に心がすでに一体化して在るという文化を持っているためではないでしょうか。

例えば針供養とか人形供養は日本の文化です。日本だけにある文化だといわれます。使い古した針を供養するとか、お祀りした人形を川に流して供養するといった“もの”を物と見ずに、そのなかに“いのち”を認めていこうという感覚的なものを持っているということです。

こちらは五穀供養と書きましたが、これは私の経験です。岩手県の二戸市にある南部煎餅の会社から、穀物を使った商売をしているので穀物に感謝する供養塔を作りたい、ついては「五穀供養」と揮毫してほしいと頼まれました。それを書いたら、来て開眼法要してもらいたいということで二戸まで行ってきました。穀物でありながら、それを“いのち”として従業員一同で供養しているのです。その会社の社長からは翌年、「社員一同で毎朝朝礼のときに五穀供養塔に拝んでいるおかげで穀物の廃棄率が半分に減りました」と年賀状がきました。いのちを持った“もの”を大切にするということが五穀供養塔でも現れてきているということだと思います。

あるいは日本の文化の中では、「水」は単なる H_2O という鉱物ではなく、“いのち”を持った存在であるということです。お相撲さんの取組みが白熱し勝負がつかないと「水入り」となり、水をつけてもう一回エネルギーという“いのち”を吹き込みます。あるいは「禊」です。あるいは「お水とり」です。こういう行事にも「水」が単なる鉱物ではなく“いのち”を持った存在であるという日本の文化の片鱗があらわれています。

次はついでにお遊びで入れました。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」。これは有名な平家物語の言葉です。祇園精舎の鐘の音とは言わないですね。音でしたら、その後の諸行無常という仏教の思想はそこから出てきません。やはり祇園精舎の鐘の「声」なのです。“いのち”がそこに籠もった存在で表現をしようとする。これもやはり日本文化の一つの形だろうと思います。こういった形で、日本人の感性は祇園精舎の鐘の「音」ではない表現を作り出してきたのだろうと思います。

B 自然に対する神聖視

これは日本人の特徴として自然に対する神聖視といいますか、神羅万象に“いのち”が宿るという考え方です。特に神道関係ではこれが盛んに言われます。神道関係の方が環境問題のときに仰るのは、「われわれは神羅万象に“いのち”が宿るという文化を持っているのだ」という主張です。それは結構だと思いますけれど、理屈から言えば“いのち”が宿るのでしたらそこに神様が宿って、また去ってしまったら“もの”は物に返ってしまうわけです。神様が去られたら元の“いのち”のない物体になるのではないか。これは私の屁理屈かもしれません。

神が宿るという考え方よりも日本人がもともと持っていたのは、神羅万象そのものが“いのち”だという考え方です。神様が宿るのではなくて、“いのち”が宿るのではなくて、神羅万象そのものに“いのち”を認めていくという六大体大の考え方のほうが私はやはりもっとインパクトが出てくるのではないかと思います。

C　少欲知足から大欲清浄の実践へ

環境問題の対策を論ずるとき、小欲知足といった方向すなわち、「われわれは欲望が増大したから制限すべきだ」という提案をよく耳にします。それは非常に結構なことなのですが、現実問題としてこれほど欲望が増大した現時点で一気にブレーキをかけるというわけにはなかなかいかないと思います。

それよりも密教独自の大欲清浄という考え方があります。大乗仏教からずっときて、ここに行き着いたのかもしれませんが、これは小さな欲望の行き着いた先の大きな欲望を意味するものではありません。この仏教の「大」は、「小」に対する相対的な「大」ではなく、量的な「大」でもなく、むしろ基準を超えていることを意味します。普通の垣根を超えている、限界を超えている、人間の境涯でなく仏の世界に属する、こう言ってもよいでしょう。つまり価値転換した、絶対的な大という意味です。大悲観世音菩薩の大悲を想って下さい。仏教で大悲という時、この大は大きな慈悲心ではなく、絶対的な慈悲心です。

仏教には、「小」に対する表現としての「大」もありますが、絶対や超越を意味する「大」もあります。この価値転換において、何を超越するかと申しますと欲の主体のエゴを超越する、エゴを捨ててしまっていることの意味に使うわけです。自我の意識を捨てたという意味の大であり、欲を捨て去ったという意味の大欲です。清浄というのはそういうことなのです。手を洗って清らかで、バイ菌がついてないという清浄ではなく、仏教では自我を超えているという意味で使います。たとえば三輪清浄という使い方があります。

ということは、大欲というものは自分自身の小さな欲望の積み重ねを多くするというのではなく、それを価値転換してエゴのための欲ではなくて、もっと大きな社会的な、あるいは仏様の欲に広げて行きなさいということです。利他の精神が備わってくる大欲という形です。いわゆる社会福祉の精神になっていきます。小欲ということでブレーキをかけるよりも価値転換するということに、密教のなかの展開の可能性というものがあるような気がします。

さきほど藤田学長の挨拶でもありましたように、真言密教では“いのち”の繋がりを非常に大事します。“いのち”というものは人間とも自然ともずっと繋がっているという考えです。こういった意味でもやはり今後の環境問題に繋がる一つの材料があるのではないかと思います。時間がまいりました。本当に上面で雑駁な辿り方しかできませんでしたが、何か一つの筋道だけは自分自身ではつけたような気がしております。今後の環境問題の議論の中にも何かの形で役に立てることができたらと考えております。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

【註】

(1)「東アジア的環境思想としての悉有仏性論」(『木村清隆博士還暦記念論集　東アジア仏教—その成立と展開』所収論文, 春秋社, 2002, pp.355-370)
(2)「一切衆生と草木土石——仏性論の中国的展開」(『中国の哲学・宗教・芸術』所収論文, 人文書院, 1988, pp.94-113)
(3) 巻第 37　迦葉菩薩品　第 25 の 5, 大正　巻第 12, p.581a
(4) 大正　巻第 18, p.275c
(5)『伝教大師全集』壱下　p.548
(6) 春秋社, 1995, pp.363-421
(7) 大正　巻第 75, p484b
(8)『定本弘法大師全集』第 3 巻, 高野山大学密教文化研究所, 1994, p.62
(9)　同上書　,p.63
(10)　同上書　,pp.18-24

第5回宗教と環境シンポジウム　パネル発表　1

地球環境の根本問題解決に向け、宗教者にしかできないこと

高野山真言宗高家寺住職／環境省登録環境カウンセラー　北川宥智

きっかけは震災復興の支援

ご紹介戴きました高家寺の北川です。今日は緊張しております。実は師匠の前で講演するのはこれが初めてでありまして、ブルブル震えて見えたらそういうことだと思って下さい。さて、私は日本で一番古い飛行場がある岐阜県各務原市で高野山真言宗の小さなお寺の住職をしています。また環境省登録環境カウンセラーでもありますが、環境省の名簿を見る限り、おそらく僧侶は私だけであろうと思います。今日はそういう立場から、既に理論については松長猊下にお話を賜りましたので、実践ということを念頭に置いてお話しいたします。

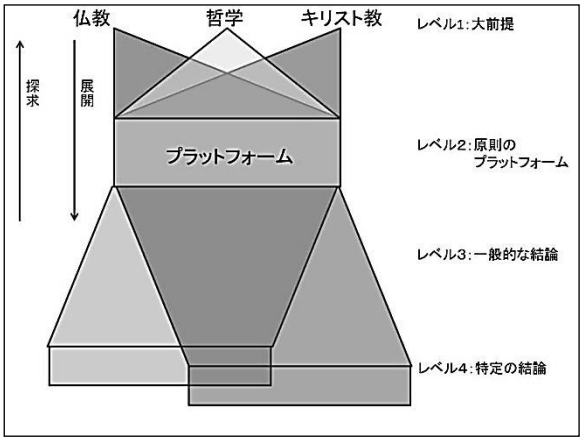
まず、私が環境に関わってきた経緯を申しますと、私が環境問題に目覚めたのは今から 20 年前です。来年は阪神淡路大震災から 20 年目となりますが、私が環境問題に初めて取り組んだのはこのときからです。高野山真言宗の復興ボランティアのメンバーとして、被災地のゴミ処理、さらにトイレ掃除をしました。もう本当に「ウェッ、ウェッ」と言って作業をしながら、地球環境問題というものを教えられました。それまでの私は、エンジンをかけエアコンも点けたまま車の中で寝てしまうような低めの環境意識しか持っていませんでした。それがその場に居合わせた東京学芸大学と中京大学の学生から地球環境問題を教えられ、やがて環境関係のボランティアを始めたのです。

その後、環境先進国のドイツに2度、合計で一か月ほど視察に行きました。そのときの見聞を中心として、年に最高50回の講演をしたこともあります。おかげさまで平成12年には、最低5年の経験値が必要な環境省登録環境カウンセラーに認定されました。以来、ずっと啓蒙活動をしてきて、いくつかの小さな効果はありました。シャトルバスの実施、クラインガルテンの啓蒙、ゴミ袋の普及といったことなどです。

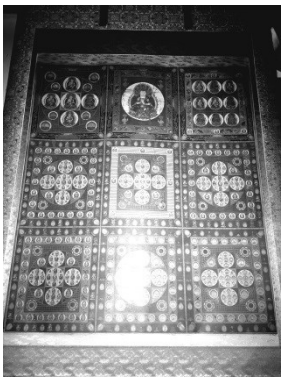
そういう一定程度の成果は上がりましたが、どうしても納得できません。それは環境悪化の速度に私たちの対応が全く追い付きそうにないということです。地球が破壊されていく速度は予想を超えてどんどん加速している。身近なところでも最近、異常気象が続発しています。さらに画面に挙げている身近な小動物（ダルマガエル・トノサマガエル、メダカ、タガメ、ドジョウ、ゲンゴロウ、ノウサギ）たちは、もう周りに見ることができなくなってしまいました。地球環境問題というのは、温暖化、オゾン層破壊、酸性雨、森林破壊等々、じつに多彩であり、その上ますます加速しているわけです。

ディープ・エコロジー再評価の必要性

ところで皆様、この方をご存じでしょうか。アルネ・ネス（Arne Naess）という方です。ノルウェーの哲学者で、ディープ・エコロジー論を1980年代に発表しました。彼は、1980年代に「今のままでは駄目なんだ」と警鐘を鳴らした人です。



ネスは政治や自然科学の技術に頼るだけのエコロジーをシャロー・エコロジーと呼び、これでは根本解決にはならない、もっと人間の奥底の哲学・倫理の部分を変えるべきだ、そうしたディープ・エコロジーが必要だ、と提唱しました。ここに挙げたブッデイズム、フィロソフィー、クリスティアニティー（仏教、哲学、キリスト教）という3つのものを例にとりまして、何が起きているのかというプラットフォームで皆で話し合い、それを事実的過程でどのようにしていくのか、そして最後に行動をとります。彼が掲げた（Arne Naess ' Deep Ecology Movement：Some Philosophical Aspects '1986 "Philosophical Inqury vol.8" p.24）このエプロン・ダイアグラムはとても素晴らしい理論です。



金剛界曼荼羅

胎蔵界曼荼羅

諸尊一覧

大日如来・一字金輪・仏眼仏母・阿閦如来・宝生如来（宝相如来）・阿弥陀如来・不空成就如来・釈迦如来・薬師如来・金剛薩埵（普賢菩薩）・金剛王菩薩・金剛愛菩薩・金剛喜菩薩・金剛宝菩薩（虚空蔵菩薩）・金剛光菩薩（日光菩薩）・金剛幢菩薩（地蔵菩薩）・金剛笑菩薩・金剛法菩薩（聖観自在菩薩）・金剛利菩薩（文殊菩薩）・金剛因菩薩（弥勒菩薩）・金剛語菩薩・金剛業菩薩・金剛護菩薩・金剛牙菩薩（金剛夜叉明王）・金剛拳菩薩・金剛波羅蜜・宝波羅蜜・法波羅蜜・羯磨波羅蜜・金剛嬉菩薩・金剛鬘菩薩・金剛歌菩薩・金剛舞菩薩・金剛香菩薩・金剛華菩薩・金剛灯菩薩・金剛塗菩薩・金剛鉤菩薩・金剛索菩薩・金剛鎖菩薩・金剛鈴菩薩・普賢菩薩（↓金剛薩埵）・文殊菩薩（↓金剛利菩薩）・聖観音菩薩（↓金剛法菩薩）・弥勒菩薩（↓金剛因菩薩）・千手観音菩薩・如意輪観音菩薩・十一面観音菩薩・准胝観音菩薩・白衣観音菩薩・勢至菩薩・虚空蔵菩薩（↓金剛宝菩薩）・地蔵菩薩（↓金剛幢菩薩）・月光菩薩・日光菩薩（↓金剛光菩薩）・般若菩薩・不動明王・降三世明王・軍荼利明王・大威徳明王・金剛夜叉明王（↓金剛牙菩薩）・愛染明王・孔雀明王・馬頭観音・烏芻沙摩明王（↓金剛夜叉明王）・梵天・帝釈天・火天・閻魔天・羅刹天・水天・風天・多聞天・伊舎那天（↓大自在天）・地天・日天（↓日光菩薩）・月天（↓月光菩薩）・大自在天（摩醯首羅天）・那羅延天・歓喜天・摩利支天・大黒天・吉祥天・弁財天・鳥摩妃・青面金剛・妙見菩薩・鬼子母神・韋駄天・布袋・寿老人（福禄寿）・福禄寿（↓寿老人）・恵比寿

ところで、いま宗教家の中でネスを知っている人はどれほどいるのか。私はいろいろ聞いてきましたが、「知っている」と答えた人は誰もいませんでした。また、技術者や科学者でも同様にネスのことを知っている人は少ないのです。素晴らしい理論であるにもかかわらず、彼の認知度はなぜ低いのか。それは彼の理論が高尚過ぎたのです。理論は本当に素晴らしいし、ぜひ皆様にもっと知って戴き、研究してほしいと願うのですが、結果的にはネスが頑張ったにもかかわらずシャロー・エコロジーばかり進んで、何十年経っても地球環境問題は本質的解決の糸口にも立っていません。ネスの警鐘は、結局活かされずじまいです。私も含めて人類は技術に走り、ネスの言うところのディープ･エコロジーなる根本的解決に思いが及んでいないのではないか。太陽光発電にしても、確かに温暖化防止には有効かもしれません。今の緊急課題ですから、やる必要があります。しかし、太陽光パネルは希少な鉱物素材を使ったりするものもあります。そのあたりに目を向けて考えているのだろうか。全体としての副作用についても計算しているのか。このような技術の負の側面について考え抜くには、哲学が不可欠だとネスは考えたわけです。しかし、このアプローチは、まだ社会には活かされていません。

苦しいときの仏頼み

地球環境問題を20年間ずっと調べて、今から7、8年前に私は絶望しました。もう、無理だと。今も正直言って現状での解決はないと思っています。というのも、私の家内はかつて環境問題を取り扱う代議士の公設秘書として衆議院議員会館にずっと詰めておりました。私の友人に環境副大臣になった人物もいます。それら身辺から上がってくる情報だけ見ていると、もう無理なのだと観念するほかなかったのです。私はそこで環境問題についてストップしてしまいました。松長猊下はその間ずっと環境問題の解決を言われていたのですが、もう何ができるのか分からない私は、にっこり笑って「うん、うん」と頷くだけで実際問題はストップしていました。

さて、苦しいときの神頼みではありませんが、もちろん私は祈りました。真言宗の僧侶ですから、「**金剛界曼荼羅**」「**胎蔵曼荼羅**」に上げられている諸尊の数だけ、2、3年かけて何度も何度も、それぞれの仏様の修法を行い、私宛のメッセージが戴けるよう何度も祈りました。この苦しいときの仏頼みにより、自分が成せる道を示してほしいと拝んだわけです。今から4、5年前やっと闇の中に新たな光が見えてきました。

一例を挙げます。先ほどの諸尊のうちの七福神は皆様もおなじみかと存じます。その中の**エビス様**は真言宗の中ではそれほど大きく扱われる神様ではありません。しかし民間信仰では誰もがご存じの、よく拝まれる神様です。このエビス様を見て下さい。大漁の神様でもあるにも関わらず、持ち物は網でなく釣り竿なのです。「釣りして網せず」の言葉がありますが、つまり、一時の暴利を貪るのではなく、適量を、必要なときに獲るのです。まさにこういう知恵を日本の神様はわれわれに既に伝えていました。ところが私たちはそれを忘れていた。「足るを知る」が、どういうことか分からなくなっていたのです。

もう一つ。今日は仏教学の先生方が多いのでお叱りを覚悟の上であえて言います。仏典を見ますと「般若波羅蜜多」という言葉がたくさん出てきます。これを一言でいえば「智慧」とされていますが、知恵では分かりにくい。私が最近よく使っているのは、「ものごとをありのままに見る智慧」だと言っています。ものごとをしっかりと、ありのま

まに見ていけば、私たちは人の噂話や通説に流されたり煩悩で真実が見えなくなったりはしないはずだ。そんな中で一筋の光が見えてきました。

環境先進国だった江戸時代の日本

最近の私のライフワークは、尾張徳川家第七代・徳川宗春の研究です。このことがきっかけで、環境問題への新しいアプローチが開けたと私は自負しています。歴史と環境とでは接点が弱いのではと思われるかもしれませんが、ここから宗春の活躍した江戸時代にフォーカスしてお話しいたします。

江戸時代の日本は、世界でも最先端の環境先進国だったことを皆様ご存じでしょうか。このことをまさにありのまま確かめつつ、私は宗春の事績を調べはじめました。

宗春は尾張徳川家の七代目ですが、江戸時代の大名というものは、そもそも江戸で何をやっていたか。もちろん地方に戻れば行政をやります。では、江戸に来たら何をするのか。荒い気風の戦国武将が、平和を享受しつつ江戸時代の大名へと、どのように変貌を遂げたのでしょうか。ここに環境問題の大事な部分が隠されていると数年前に気づいたのです。

こちらは、家康、秀忠、家光の三代に仕え、寛永寺と日光東照宮の創始者となった**南光坊天海僧正**（写真：長楽寺蔵〔太田市立新田荘歴史資料館寄託〕）です。天海僧正の名前にご注目下さい。「天、海」です。明らかに「空、海」を意識した名前です。その彼が戦国の将士の気風をどう切り替えていったのかというと、彼は天台宗ですから天台密教の教えももちろんありますが、儀式を通して荒々しい感情を切り替えていきました。その儀式は、季節ごとの行事で、江戸城では五節供と呼ばれていました。これらによって武士の魂を切り替え、それが地方へも広がって江戸時代の平和思想、それから環境先進国へ進んでいったことが分かってきました。

宮中の節会（せちえ）

元日節会（正月一日）
白馬節会（あおうまのせちえ）（正月七日）
踏歌節会（正月十六日）
上巳節会（三月三日）
端午節会（五月五日）
相撲節会（七月七日、のち七月下旬）
重陽節会（九月九日）
豊明節会（十一月新嘗祭翌日の辰の日）
釈奠
盂蘭盆

平安時代初めの弘法大師や伝教大師の時代には、宮中に**節会**（せちえ）という行事がありました。これは南北朝時代でほとんど絶えていたのですが、天海は節会を組み直し、**五節供**としたのです。これは江戸時代の五節供、それに付随する行事です。嘉定頂戴、八朔、玄猪という意味のある行事もさせていきました。それを行うことにより、お歴々の大名ばかりか江戸の庶民にも季節感が非常に大切なものになっていきます。そうした生活感覚がいつの間にか空気のように広がると、いったい何が起きるか。皆が当たり前のように自然を享受し、自然と共生し、自らが自然と一体になっていきました。史料に当たるうち、それが見えてきます。当時の人たちは厄除けをたくさんしていました。家族や自らの人生に現れる災厄があることを、すなわち恐れるということを知っていました。恐れると何が行われるか。神仏に自分の罪を懺悔し、随喜し、勧請するのです。以前、松長猊下から、仏教には感謝という言葉が見当たらないと言われました。私はそのことをヒントにいろいろ探ってみて、実は懺悔と随喜が一つになったところが感謝なのではないかと最近思っています。文献的にはまだ丁寧に調べていませんので、これは思いつきの段階ですが、おそらく当たっていると感じています。

五節供

江戸時代　南光坊天海僧正によって制定
旧暦一月七日　人日
旧暦三月三日　上巳
旧暦五月五日　端午
旧暦七月七日　七夕
旧暦九月九日　重陽

旧暦六月十六日　嘉祥頂戴
八月朔日　八朔
十月第一亥の日　玄猪

こういう気持ちを持って当時の江戸の人々は段々変化します。元禄時代、ちょうどお犬様で知られる五代将軍・綱吉の頃どうなっていたかというと、庶民に至るまで日本中の人々が季節の行事を堪能するようになっていました。このことは外国、すなわち当時国交のあったオランダを仲立ちとし、ヨーロッパ各地に記録が残されています。将軍の代替わりなど、節目ごとに長崎商館長は江戸を訪れていますが、これに随行した侍医が、博物学的興味をもって道中の様子を記録していました。綱吉のときはドイツ出身の侍医のケンペル、後代ではスウェーデン出身の侍医のツュンベリー、さらにドイツ出身のシーボルトらの記録があります。

それらには一様に、「日本の人たちは貧しいけれど、草々を愛で、小動物を目で追い、本当に楽しそうに生きている。まさに天国だ」といった言葉が書かれています。江戸時代というのは平和に生き、そして皆が季節の行事を中心に、経済さえもこの季節の行事を中心に回っていたのです。これは私の手前味噌なのかもしれませんが、弘法大師は仏を梵字一文字や象徴物である三摩耶形で表現する密教を選ばれた方ですが、同じように松尾芭蕉は俳句を、千利休や宗旦はお茶の世界を選んで季節感を自然観へと凝縮させたのだと思います。

たとえ俳句や茶道といった高尚な文化的営為に触れなくても、季節の行事に触れることによって、一般庶民も、最下層の人でさえも季節の行事のなかで自然と共に生き自分が自然と一体となって生きるようになっていきました。もちろん江戸時代は寺社仏閣がたくさん築かれた時期なので、森林破壊が行われています。ただ、そのことが理由で河川が氾濫し荒れた場合、それに気付くとただちに山々を復活させるよう為政者は指示を出しました。

五節供と檜皮葺屋根の思想

天海僧正が密教思想をベースに、神道を融合して作り上げた五節供。この五節供こそが荒々しい戦国武将の魂を鎮め、知識だけではなくて身体をもって自然の在り方というものを知らしめていきました。まさに体感させたのです。その儀礼は現在もこのような形で残っています。ただし形だけになってしまいました。というのも明治の改暦により太陰暦と太陽暦が錯雑し、いつの間にか太陽暦の日付で太陰暦の行事を行うようになってしまったからです。ところで今、「お雛様」といったら3月3日にお祭りやっている人がほとんどではありませんか？ 「桃の節句」の「お雛様」は、太陰暦の3月3日に催されていたものですから、太陽暦に直せば本来は4月3日前後に行うべきものです。このように、もともとの季節感を伴わない行事を形だけ行っているのが現状です。生活と自然との乖離を感じざるを得ません。季節感にもとづく天地の巡りへの感謝も喜びもないため、行事はいつのまにか形骸化し、本来の意味を知る人さえ稀になりました。神社仏閣で行っている行事も、季節感のない催事へと変わってしまったように思います。

先日伊勢の環境フォーラムに出かけた際、大宮司の鷹司様からお聞きしたのですが、檜は一年間で4ミリ太くなるそうです。そうすると、柱として使えるためには直径が80センチメートルは必要なので、約200年かかります。その200年先を見つめた上で、伊勢神宮では森林を育てることにしているとも聞かされました。同じように、私たちの高野山真言宗には、山林部という非常に特殊な部門があります。こちらも数百年先に配慮した森林事業に努めています。目先の技術に心を奪われるのではなく、200年先の社会を見つめるためには何をしたらいいのか。それらの工夫をぜひこの機会にご覧になってお帰り下さい。

たとえば、その一つが金剛峯寺の**金剛の上にある桶**です。画像のこれを皆様はご覧になられたでしょうか。金剛峯寺の檜皮葺き屋根に設置されています。これは雨水を貯め、万一の落雷・火災を防いでいます。また肝心なのは、屋根を葺いているこの檜皮の利用です。檜の皮を一旦剥いたあとは、約80年から100年の経過でまた元に戻るといわれています。同時に、80年から100年経つと檜皮葺きの屋根が崩れますから、再び屋根を葺くことができるわけです。自然の循環サイクルに合致してこのような屋根が存在いたします。環境の中に生み出された技術は、天地の巡りを根拠として数百年先に配慮してでき上がってきます。現代人は、技術といえば工業の生み出す化学素材ばかりを今は思い浮かべがちですが、これら伝統的技術を次世代に受け渡していくことも宗教者の一つの使命と考えます。すぐに陳腐化し崩れる技術ではなく、オーガニックな循環サイクルのなかで物事を行っていくということです。それが檜皮葺の屋根なのです。

最新の情報を得ました。昨日あるところでこんなことを聞かれました。「高野山に来ると杉と檜しかないように見えますが、実際はどうなのですか？」と。そのとき曖昧な答えをしたのは今日少しお話したかったからなのですが、高野山には高野七木があります。その木の陰々で最近「山藍」が見つかりました。何かご存じですか？これは大嘗会という宮中の儀式で、百官が着用した小忌衣（おみごろも）を染めるのに必ず使わなくてはいけない染料の植物です。大陸や半島からの移入種でなく、日本自生の種になります。これが高野山のある場所で大量に見つかりました。昔は石清水八幡宮に非常に多かったようですが、今はありません。そういうものが人知れず山林部によって守られています。

かくいう私が今、何をしているのかというと、この季節の行事をずっと行っております。この季節の行事こそが実は環境問題を救う一番のキーポイントになると思います。15分の予定でしたが、長くなりましたので、この続きをディスカッションのときにお話できればと思います。今日はありがとうございました。（拍手）

第5回宗教と環境シンポジウム　パネル発表　2

環境文化と物語――文明論的視点から見た宗教の役割

同志社大学 神学部教授　小原克博

モダンとポストモダン

同志社大学の小原です。よろしくお願いします。時間が限られていますので配布しました発表要旨をもとに、ポイントをお話ししていきます。

今日、私が注目したいことの一つは、「物語とは何か」です。物語と宗教の役割について考えてみます。

最初の話題は、現代とはどういう時代かということです。これには様々な描写の仕方があり、学問的にはポストモダンと言われることもあります。これは私たちの時代があることを区切りとしてモダン、すなわち近代とは違う時代に入ったということを示しています。

では近代とはいったい何なのか。じつは、近代に対する理想のようなものがかつては思想の場にありました。それはたとえば人間の持っている理性や合理性、そうしたものをきちんと追求していくことで、より良い社会を形成できるという理性への信頼です。

あるいは近代化プロセスの中で生まれた国民国家においては、いずれは人種差別をはじめとする様々な問題が解消していくであろうと期待されました。19世紀における近代は、そのように大きな信頼と期待を理想として担っていました。

ところがポストモダンという言葉を考えたリオタールによれば、そういった理想も二つの大きな世界大戦によって崩されたとされます。つまり、理性と合理性を持っているはずの人間が血で血を洗う戦争を行い、多数の人命が失われたからです。国家に対する期待とか人間の理性に対する信頼というものは、まさに近代の「大きな物語」だったわけです。大きく皆と共有できる、人類にとってのリソース（資源）のような思想がかつてはあったのですが、今われわれはそれを持つことができません。したがって彼はその状況にポストモダンと名付け、「大きな物語」が失われた時代をわれわれは生きていると描写したわけです。

これを宗教に当てはめるとどうなるか。最も典型的な例は中世カトリックでしょう。

カトリック教会の中に、学問から科学から政治から何から何まで詰め込まれていた時代がありました。しかし、それが近代を経て現代になりますと、宗教のありかたは「大きな物語」によって担保されているというより、一人ひとりが自分にカスタマイズされた宗教性を持っているという状況になります。これを現在では、たとえばスピリチュアリティという言い方をします。それらはオーダーメイドの小さな物語になり、つまりセグメント化され、バラバラになった小さな物語として社会に乱立しています。それら小さな物語、様々な物語を消費することで現代の宗教性が成り立っていると言うことができます。

これはこれで現代、つまりポストモダンの時代の特性ですからよいとは思いますが、今回のシンポジウムのテーマである環境問題のような地球規模の問題を考えるときには、小さい物語の集合体ではとても手に負えないわけです。ですから私たちは地球環境問題を考えるとき、何を信じ、あるいは信じないにかかわらず、共有できる物語を作っていかなければならない。これが私の今日お話ししたいことです。細部までお話しする時間はなさそうなので、言いたいことを二つのテーゼにまとめておきました。

テーゼ1

環境問題における宗教の固有の役割は、社会の固有性を刺激する物語を語り続け、環境文化を形成していくことである。

テーゼ2

日本宗教の固有の役割は、グローバル世界の大きな物語と対峙できる物語を文明論的な視点から形成することである。

テーゼ1

まず、テーゼ1に関して。

ここで私が一番問いたいのは、宗教はたしかに様々なことができるが、宗教にしかできない固有の役割はいったい何かということです。もちろん宗教団体の中には生長の家のメガソーラーやゼロエネルギービルディングといった有意義な取り組みも見られ、それらの成功例を社会全体に示すことは他の大きな励みになると思います。ただ、すぐに全ての教団で同じことができるわけではありません。そこで、これまで宗教が担ってきた固有の役割とは何か考えるわけです。

まず一つは、記憶を長い年月に亘って継承していくということです。というのも、現在インターネット等の発達により、情報を簡単に入手できる時代になっていますが、それゆえ私たちの社会はしばしば記憶喪失に陥り易いからです。日頃経験するところでは、どんな大きな出来事が起こっても、次にまた起こる新しい出来事により視野の外へと記憶は押し出されていきます。情報が溢れ過ぎていることにより、一年前に何があったのか、それすら私たちはきちんと思い出せません。ですから私たちの「記憶する」という力は、現代において極めて脆弱になっているのです。

ところが宗教は、「記憶のエシックス」を持っています。特に伝統宗教はその力において優れています。具体的に申しますと、高野山は来年が開創1200年にあたり、今その準備をしています。このように1200年も物語を語り継ぐほどの力をもつ団体は、現代社会では他にほとんどありません。つまり100年、200年、あるいは1200年という単位で記憶を継承できる存在は、おそらく宗教組織をおいて他にないのです。しかし案外、当該の宗教は「当たり前のことをただ普通にやっているだけ」と考えているかもしれず、自分たちの固有性になかなか気づきにくいわけです。ですから、その力を現代においてどう発揮したらよいのか改めて考えるべきでしょう。つまり現代には様々な問題が起こっていますが、そのことに対し、しっかり考え続けるためのエネルギーを供給できるはずだということです。

二つ目に、世代間倫理が挙げられます。世代間倫理とは公共性の再解釈ということです。私は宗教という立場からの発信が、社会、あるいは公共性に影響を与えることができるとするなら、それが最終的には環境問題にも繋がっていくと考えます。ただし、世俗社会が想定する公共性と、宗教的世界が想定する救済対象の範囲とでは違いがあります。世俗社会では、いま生きている世代の人たちが対象になりますが、宗教の場合は生者と死者の関係、それから何百年も前の先達との関係、あるいは今日、松長猊下がお話し下さったような有情と無情、生命・非生命の関係、そういった事柄にまで関心を向けます。したがって、宗教が長い世紀をかけて紡ぎ上げてきたこれらの資産というべきものを、現代の世界においてもっと大きな公共性として示すことができるのではないかと考えています。

ただその際、宗教の内部においてのみ理解し合える専門的術語にだけ頼って説明し、それで事足れりとしてしまうと、そのメッセージは社会にうまく繋がっていきません。ですから私たちは取り扱う問題を現代の人々に分かりやすく提示するとともに、現代人が到達し得た科学的知見を十分ふまえ、新たな公共性を作っていくべきです。私がしばしば参照し、環境問題を考える際に多く学んでいるのは、たとえば生物多様性の問題です。それから遺伝学や進化生物学です。これらを学べば学ぶほど、自然の叡智に驚き、また人間の小ささに気付かされます。

こうした科学の知見を宗教者は尊重すべきです。それらに向き合い、場合によってはそれに学びつつ新たな公共性を作っていく中で、私たちは現代世界が持っている過剰な人間中心主義から離れ、また過剰に現代世代中心的でもない新しい公共理解を形成していくことができます。そのプロセスで、私たちは見失ってきたものも同時に再発見していくのではないかと感じます。

宗教といいますと長い伝統を持っている、古いものをしっかりと抱きかかえているという目で世間から見られています。しかし、いま宗教者が果たすべき役割は、古いものと新しいものを何らかの手立てで繋ぎとめていくことだと思います。いま、そうした古いものと新しいものを繋ぎとめていく力を発揮できれば、それは大きな魅力になると思います。おそらく空海が高野山を開創したときに行ったのは、まさにそうしたことだったのだと思います。学んだことと、いま目の前にある課題、古いものと新しいものを組み合わせていく知恵を、私たちは新たに発見すべきであろうと思います。

現実の日本社会においては、とくに3.11以降、様々な議論のなかで自然環境の問題も議論されてきました。その中には原子力発電の問題もありますが、その議論の中心は経済効率がどうか、あるいは技術的な安全論です。経済と技術が議論のほとんどすべてを覆い尽くしており、倫理的な問題に関しては見るべきものがありません。

このことに関係しますが、少なくとも日本の政治家は倫理レベルでエネルギー政策を語ることはしませんでした。ところが、3.11 の直後、ドイツのメルケル政権は倫理委員会を開設し、2 か月後に報告書を出させました。

そしてその報告書を見たメルケル首相は、それまでの原発推進の態度を一夜にして変え、20 年以内にドイツは原発を停止すると決断しています。その報告書の倫理的な議論には、宗教者も関わっていました。そういった議論を経て、ドイツではエネルギー政策の決定がなされるわけです。原発事故の当事国である日本ではどうかというと、残念ながら今の日本にはその部分がありません。ないとするならば、長期的なビジョン、そして倫理といったものを含んだ物語を強く語り続けていく使命が宗教者にはあるだろうと考えます。

テーゼ 2

次にテーゼ 2 です。グローバル世界の大きな物語と対峙できる文明論的な物語の形成です。先ほどリオタールの例を引いて、私たちの世界においては分断された小さな物語だけがあるとお話ししました。しかし、他方で世界を見ると、そうではないという指摘もあります。ウォルター・ラッセル・ミードは二つの大きな物語を指摘しています。

一つはアブラハムの物語。もう一つは資本主義、進歩主義の物語です。アブラハムの物語、すなわち、一神教を私は専門としていますが、21 世紀世界は好むと好まざるとにかかわらず、そのアブラハム的伝統の影響を受けています。その「大きな物語」によって、多くの若者が中東だけでなく欧米からかき集められています。それがいま「イスラム国」と言われる存在となっています。これは単に戦いの場がそこにあるというだけでなく、イスラム的な意味での「大きな物語」が語られているわけです。もちろんそれが正しいことかどうかよく吟味しなければなりませんが、物語はやはり人を動かします。ただし現代世界において人を動かす物語は、しばしば暴力的なものが多いのです。暴力、そして相手に対して憎悪を振り向けるヘイトスピーチの類がその行き着く先になります。ヘイトスピーチも放置しておけば最終的には暴力に繋がります。そうした暴力的な物語ではない、別の物語が私たちに求められています。このアブラハム、一神教的な物語と資本主義、進歩主義の物語をどう評価するかは人により立場により様々でしょう。しかし、無視できないのは明らかです。われわれは直接的にアブラハムの物語の影響を受けているわけではありません。日本では一神教の信奉者はキリスト教だけで考えても 1 パーセントもいません。極めてわずかです。しかし、日本は近代化の中で、欧米に倣い大国になろうとしました。資本主義、進歩主義の夢に乗ろうとしたわけです。そしてそのプロセスの中でキリスト教を中心とするキリスト教的西洋国家を過剰に意識し、日本もやはり宗教的国家の装いをしてきました。

ですから、日本の近代化と、この二つの物語は密接な関係を持っています。さきほど松長猊下が基調講演で二つのものの見方をお話し下さいました。神・人間・動物か、あるいは有情・非情かといった問題です。これは確かにタイプが違います。ですから、タイプの違いを私たちは認識すべきですが、ここに優劣関係を持ち込むことからは私たちはそろそろ卒業したほうがよいと考えます。とくにこのことと関係するのが環境問題です。日本では一般的にもしばしば言われ、神道の方では強調されることもありますが、もともと日本には非常に優れた自然理解があって、環境破壊的なキリスト教の世界とは違うのだ、という言説が流布しています。しかし市民レベルの実際の環境運動などでは、明らかに欧米世界のほうが実績を積み進んでいます。私たちはそうしたことを謙虚に見ながら、西洋対東洋、一神教対多神教という違いを越えなければ、本当のグローバルな問題解決を得られないでしょう。ですから西洋・東洋を超え、両者の間をブリッジできるような普遍性をどう作るのか、そのことをしっかり考えるべき時期にきています。竹内好に関する引用文にもありますが、そういう普遍性構築が現在の私の課題でもあります。

> 西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために、西洋をもう一度東洋によって包み直す、逆に西洋自身をこちらから変革する、この文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しによって普遍性をつくり出す。東洋の力が西洋の生み出した普遍的な価値をより高めるために西洋を変革する。これが東対西の今も問題点になっている。これは政治上の問題であると同時に文化上の問題である。（竹内 1981、114-115）

ナショナルとグローバルを繋ぐ

最後にナショナルな物語に対抗し、日本宗教の固有の役割を意識して、それを強みとして発揮すべきであると私は思っています。ただ、同時に日本の近代史を振り返ったときに、それがナショナルな物語へと転化していかないための工夫、あるいは気づきも必要です。というのは日本では「自然」というイメージが、しばしばネーション（国民）のイメージ形成に中心的な役割を果たしてきたからです。ですから、日本における「自然」愛というものが結果的に日本中心主義へと滑り落ちてしまう前に、むしろそこを起点として世界に発信していくのに相応しい「自然愛」のメッセージへと、より普遍化されていく必要があると思います。

最後の結論になります。環境問題への取り組みの中で、さきほど述べたグローバルな影響力を振っているマスターナラティブ、大きな物語を意識することは大切です。ただ、だからといってその反動として排他的な文化ナショナリズムへと傾斜すべきではありません。宗教が、グローバルとナショナルの間にある緊張関係を冷静に見据えて、その両方に貢献できるビジョンと倫理を物語ることができれば、結果として環境文化の形成における日本宗教の固有の働きを国内だけではなく国際社会に対しても示すことができるのではないかと考えています。以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

【参考文献】

小原克博 2010『宗教のポリティクス――日本社会と一神教世界の邂逅』晃洋書房。
竹内好 1981『竹内好全集』第 5 巻（方法としてのアジア、中国・インド・朝鮮、毛沢東）、筑摩書房。
ミード、ウォルター・ラッセル 2014『神と黄金――イギリス、アメリカはなぜ近現代世界を支配できたか』（下）青灯社。
モーリス＝スズキ、テッサ 2014『日本を再発明する――時間、空間、ネーション』（伊藤茂訳）以文社。
リオタール、ジャン＝フランソワ 1986『ポスト・モダンの条件――知・社会・言語ゲーム』（小林康夫訳）水声社。

第5回宗教と環境シンポジウム　パネル発表　3

いのちの危機とその回復－21世紀における生命の畏敬の倫理再考

天理大学 おやさと研究所　教授　金子昭

環境問題と平和問題

天理大学おやさと研究所の金子昭です。よろしくお願いします。私のテーマは「いのちの危機とその回復」としています。具体的には「生命の畏敬の倫理」を創唱した哲学者で、思想家、宗教者でもあるシュヴァイツァーの理論が、この 21 世紀にどのように適用可能かという話題です。はじめに環境問題について私自身の考え方を申し上げ、シュヴァイツァーの話に繋げていきます。

環境問題というのは平和問題とよく似ています。総論においてはみな賛成です。平和も同じです。平和に反対する人は、相当の変わり者であろうと思われます。同じように環境問題に反対（否定）する人も、やはり相当の変わり者ということになるはずです。ところが各論になりますと、やはり反対意見が出てきます。では、反対意見はどんなときに出てくるのでしょうか。それは、自分自身の利害得失がそこに絡んでくるときです。

平和問題で考えますと、たとえば宗教者も自分の富は他人に施しなさいと勧めます。物は、欲している人に与えなさいというわけです。昨今の領土係争で例えるなら、日本の領土を欲しがっている国があれば、宗教的立場から言えば譲ってもいいのです。しかし国民の立場からすれば、それは当然できない話なのですね。利害得失がそこにあるからで、勝手に取られたら、武力でもってでも取り返すということになりかねません。環境問題に関しても、自分自身の土地をこれから開発したいと思っているとき、希少生物がそこにしかいない姿で発見されたなら、環境省からストップがかかります。その処置は当然かもしれません。しかし一方で、「それはうちの土地なので困ります…」と反対の声も挙がってきます。そして、勝手に規制をかけられたら、裁判でもってでもそれをやめさせるということにもなりかねません。

そう考えますと、宗教者として、あるいは国民としての立場など様々ありますが、いま一度原点に立ち返り、環境と「いのち」について考えるべきだと、倫理学を学ぶ者として一言申し上げたくなります。

生命の畏敬の倫理とシュヴァイツァー博士

いのちというのは人間が作り出すことのできない究極の真理です。だからこそ、そのいのちに対して私たちは畏敬の念を抱きます。畏敬とは、畏れと敬いという二つの意味が入った漢語です。そこに立つ責任倫理が、生命の畏敬の倫理ということになり、これは人間性に生きる人間としての立場を表明するものです。

ここからシュヴァイツァーの話になるのですが、彼は 1875 年に生まれ、1965 年に 90 歳で亡くなった長命の哲学者です。最近の若い方は、マザー・テレサをよくご存じですが、同じようにシュヴァイツァーは、かつて偉人伝とか学校の教科書で必ずお目にかかった人で、このため年配の方の間には今でも高い知名度のある人物です。彼は、30 歳までは学問と芸術に生き、30 歳以降は人類への直接奉仕（医学）に生きようと決意しました。

若年で神学、哲学、音楽の分野で天才的活躍をしつつ、30 歳にして医学部に入り直して医学の学位を獲た後は、医師として現在のガボン共和国、当時フランス領の植民地だったコンゴのランバレネに赴任しました。90 歳で没した彼のお墓は、ランバレネに設立された彼の病院のそばにあります。シュヴァイツァーは文字通りアフリカの土になったわけです。

さて、タイトルに掲げた「生命の畏敬の倫理」については、彼は 1915 年にこの理念を得ました。自伝『わが生活と思想より』の中の印象深い記述では、熱多雨林のジャングルの中、往診のため小船に乗り水路を行く途中、カバの群れに行き遇って思いついたといいます。彼はいのちを何と表現したか。それは「私は生きんとする生命に取り囲まれた生きんとする生命である」です。熱帯雨林の生命に満ち溢れた世界の中にあって、生命の塊のようなカバの大群が目の前に突如として現れて、改めてふと自分自身を振り返ったとき、その自分もやはり、彼らと同じように生きようとするいのちだったのだ、という感動が込められた言葉です。私は、おそらくこれが小原先生のさきほど語られた、宗教の「大きな物語」の可能性ということで言われた物語の核、あるいは種になるものであろうと位置づけています。

この生命の畏敬という立場から帰結する倫理の原則は非常にシンプルです。つまり善とは何か、です。倫理は必ず善悪について判断しますが、善とは「生命を維持し促進する」ことであり、悪とは「生命を破壊し棄損する」ことである。このようにシンプル極まりないものであります。このようにシンプルなるがゆえの責任倫理としてあるということです。生命に対して無制限に責任を持つということ、そのことを指すわけです。彼自身、生命の畏敬の倫理に基づいて活動したわけですが、それを自分で定式化し、「自らの生きんとする生命を、他の一切の生きんとする生命に行為を通じて捧げること」としました。この理念を、生命の畏敬に生きるということとして語っています。つまり、他者の生命への献身をすることが、自分自身のいのちを全うさせていくことだ、という表現です。

本日の基調講演で松長猊下は「大欲清浄」についてお話になられました。私はそのご趣旨を、自分自身のいのちを全うする、それは他者のいのちに奉仕することによって自分自身のいのちを全うしていく大いなる欲の表れであると、そのようにも位置づけられると理解させて戴きました。

いのちの広がりと世代間倫理の当事者性

生命と言ったりいのちと言ったりしていますが、私は単なる生物学的生命を超えた生命を現わす言葉として、日本語の「いのち」はとてもよい言葉だと思っています。宗教のいのち観は大きな広がりを持っています。これも松長猊下のお話と重なってくる内容になりますが、私はもう少し身近なところから考えてみます。

まず、血縁的な親子関係があります。この関係を擬制的に拡張すれば、世の中のお年寄りはみな自分自身の親であり、年下の人は自分の子供と考えることができるかもしれません。さらに宗教的に敷衍すれば、究極な親は神であり仏であるとも言えます。浄土教では親様と言いますし、天理教、金光教では親神と言ったりします。世間の人々の関わりにおいてもその拡張が可能なら、おそらくどの宗教も同意してくれるだろうと思いますが、誰もが自分自身の兄弟姉妹となります。なぜかといえば神仏を親とするならば、だれでも普遍的な意味で兄弟姉妹であり、神仏の子供になってくるからです。

ここまでは人間に限定した場合ですが、地球上に生きとし生けるものはすべて同じいのちある存在だと考えたとき、山川草木にいのちが宿る、いや山川草木そのものがいのちであるという言い方も可能になります。こうしていのちは空間的に広がっているのだというわけです。水というものにいのちがあると猊下は仰せでしたが、シュヴァイツァーは水が結晶して氷とか雪の形になったものにもいのちがあると見ました。彼はプロテスタントの牧師でしたから、そのプロテスタント教会の中でそういう説教をしているのです。それから人間の作ったものにもいのちが込められている。彼はパイプオルガンの演奏家でもありました。今のパイプオルガンは電気を使って近代的な音を出すわけですが、昔のパイプオルガンは音を出す人が別にいて、人力で鞴（ふいご）を踏みながら、素朴な音色を出したわけです。そういう古色ゆかしい音色にもいのちが籠もっている。だから古いパイプオルガンを修繕することにも彼は力を注ぎました。そのように考えると、いのちはあらゆるところに存在すると言えます。

いのちは、空間軸だけでなく時間軸でも考えられます。たとえば現在の繁栄のツケを子孫に回してしまうライフスタイルは、現在世代による未来世代の生命に対する侵犯行為であります。これは世代間倫理と言われる考え方です。この考え方には非常に高く評価すべき点があり、しかもこれは宗教的な意味を込めなくても語りうる倫理です。そこからさらに、大自然の大きな一呼吸の合間にわれわれの無数のいのちがあるとする、超長期的な時間軸で物事を考えるなら、一般的な世代間倫理から宗教的な世代間倫理へと繋がってくるのではないかと思います。

それは、世代を超えて存続するいのちの流れにあって、未来の生命も私たち自身の生命の延長線上にあり、実は私たち自身のいのちの姿ではないかということです。仏教では輪廻ということを言います。自分自身が今のいのちがなくなっても、次にまた別のいのちで生まれ変わってくるわけです。そうすると将来世代に生まれ変わってくるいのちは、実は自分自身のいのちの姿でもある。そうであるなら、これは時間軸を超えたいのちの広がりであります。そうした当事者性を伴ってくるものではないかと思うわけです。

環境倫理と現実問題

このような宗教的で理論的な生命観を、今度は現実問題と繋げていかなければいけません。アメリカの生物学者であるレイチェル・カーソンは、1962 年に『沈黙の春』という書物を書きました。実はこれはシュヴァイツァーに捧げられた本です。化学物質による自然生態系の撹乱に警鐘を鳴らした本として知られていますが、当時は誰も化学物質が大きな公害を引き起こすとは気づきませんでした。それは当時、まさに「想定外」の指摘だった

といえます。想定外という表現は、われわれも 3.11 の震災のとき何度も聞かされた言葉です。そうすると、この言葉を何度われわれ人間は繰り返せばいいのだろうか。それならば最初からいのちの危機の自覚に立って人類の文化・文明の在り方に根本的な批判の眼差しを向けるべきではないか、と言うべきでしょう。

地球を守るというのは私たちが生かされている基盤を守るということです。しかもそれは生命の畏敬、恐れと敬いの心で接することが前提であるべき事柄です。自然環境に無限な欲望を向ける開発思想そのものを方向転換し、文化・文明の精神的成熟へと人々の意識を向け直す必要があるのではないでしょうか。

日本人の自然観の長期的推移を表わすグラフがあります。国民性調査のため統計数理研究所がまとめたものです。人間が幸福になるためには「自然を征服したほうがよい」という考え方、そうではなく「自然を利用したほうがよい」という考え方、さらに「自然に従ったほうがよい」という考え方の 3 つがあるとして、どれが妥当と思うか尋ねています。すると 1970 年を境に、自然を征服するという考え方が減り、逆に自然に従うという考え方が増え、今はそれが多数を占めています。

この 1970 年代は、日本では公害問題が取り沙汰されていた時代です。公害問題というのは非常に問題の構図が見えやすい。公害を引き起こす悪徳企業とその被害を受ける国民という図式です。しかし今はもっと構造が複雑になっています。その典型的なものが原子力発電でしょう。原発は実は事故の起こらない正常運転下でも放射能を出しています。また、よく指摘されることですが、劣悪な環境のなかで働く原発労働者の実態というのもあります。差別問題と絡み、弱い立場にしわ寄せがあることも分かってきました。京都大学原子炉実験所の小出裕章先生によれば、100 万キロワットの原発一基が一年間運転されると、そのことで広島型原爆 1000 個分の核分裂生成物、要するに使用済み核燃料の蓄積がもたらされるのです。これはまさに次世代のいのちへの侵犯行為ではないでしょうか。

原爆・原発と人間の選択

シュヴァイツァーの最晩年は、東西の両陣営が原爆実験、水爆実験を繰り返していた冷戦の時代にあたります。その頃多くの人々は、来たる第 3 次世界大戦では原爆を使用した大量殺りくが行われると心配し戦争反対を唱えておりました。シュヴァイツァーももちろんその視点を持っていましたが、彼は大量殺りく兵器への反対のみならず、むしろ放射能がいのちに与える長期的影響の面から非常に心配していました。もし今、シュヴァイツァーが生きていたなら、原発の問題に対しても同じ視点から反対を表明したに相違ないと想像しています。

私は、原発問題というのは人類価値選択の問題ではないかと思っております。それは責任倫理に基づいて行う価値の選択の問題ということです。現在世代の一時的な利益や繁栄と、半永久的な未来世代の負担を除き、いのちの尊厳を守ることと、より大切なのはいったいどちらなのかということです。宗教的には、未来世代を語ることが実は私たち自身のいのちを語ることの延長線上にあり、それはつまり私たち自身のいのちの問題そのものだと言いきってよいと思うのです。そういう意味で、原発問題は、いま宗教者が自らの真価を問われ正念場を迎えている問題であろうと考えております。

文化・文明のあり方と個人の生き方の選択について考えてみましょう。よく話題になるのですが、原発による放射能汚染を甘受するか、それとも化石燃料使用による地球温暖化に耐えるか、こういう二者択一が提出されます。もちろん、どちらをとっても人類にとっては高くつきます。しかし思うのですが、そもそも快適な生活というのが人間にとって高くつくものなのです。卑近な例ですが、資源やエネルギー消費の効率を考えず快適な生活を楽しめば、電気代や水道代は当然高くなり、金銭的にもったいなく感じられるかもしれません。ただ、もう少し考え方を広げ、同じもったいないと言うのでも、物とか自然それ自体が持っているもったいなさ、有り難さにまで発想を拡張できるのが宗教者ではないかと私は思います。文化・文明の本質は、シュヴァイツァーによれば内面的な進歩にあるのです。換言すれば成熟ともいえるでしょう。そして、文化・文明の射程はどこまでも人間性、ヒューマニティを目指している。人間性以下のことは非人間的だと言います。しかし同時に人間を超えたようなこともまた人間という射程を超えるなら、同様に非人間的になってしまうのです。

個々人の責任と生命の畏敬の倫理

ここから締めくくりの話になります。生命の畏敬の倫理は、そもそも個人倫理として唱えられていました。それが社会とどう関係していくかという問題です。

意外かもしれませんが、実は社会の倫理には生命の畏敬の倫理はスムーズに繋がらないのです。これはシュヴァイツァー自身、『文化と倫理』という本の中で強調しているのですが、むしろ個人と社会とを対決させるという性格を持っています。つまり、生命の畏敬の倫理は絶えず人間に現実と対決することを迫り、倫理的葛藤のな

かで決断を促すということなのです。

たとえば目の前に雨上がりで大きな水たまりができていたとします。そして、そこに一匹の蜘蛛が浮かんでいるとします。蜘蛛が溺れそうに見えたので、拾った棒きれに掴まらせて近くの木の枝に移してやりました。これは多分だれでもできると思いますし、確かに生命の畏敬の実践に繋がるかと思います。ところが、助けられた蜘蛛は助けられたことに感謝して心を入れ替え、これからは小さな動物を食べるのは止めて草食にしますと決心するでしょうか。そうはいきません。やはり蜘蛛としての本能からして、そのあと小さな昆虫を何百何千と食べて生きていかなければいけない。そうすると、自分が蜘蛛を助けたことは何だったのかということになります。一匹の蜘蛛を助け、引き換えに何百何千という小さな昆虫のいのちを奪ってしまうことになっただけではないか。

しかし、それはどこまでもその人の個人としての決断なのです。つまり目の前にあるいのちに対する自分自身の責任がそこで問われているということです。人々はそこで葛藤します。その葛藤を深く体験すればするほど、実は私たちは真理の中にあるのだとシュヴァイツァーは強調します。「疚しくない良心というものは悪魔の発明である」とさえ言っています。つまり良心というのは疚しいから良心であって、疚しくなければ良心でも何でもないというのです。非常に面白い指摘だと思います。これは後のディスカッションの材料になるかもしれません。

したがって社会に判断の下駄を預けないことが大切です。このシンポジウムでも最後に大会宣言を出しますが、大会宣言を出して安心してしまったらやはり同じことになってしまうでしょう。そうではなく、その宣言やガイドラインでも、またルールでもよいのですが、そういうものを作ってそこの上に安住せず、なおかつ一人ひとりが自身の倫理的な責務として引き受け、常に自ら考えながら、葛藤しながら解決を模索していく。実はこれこそ生命の畏敬の倫理というものが私たち一人ひとりに迫ってくるものなのです。そのことはシュヴァイツァーが生命の畏敬の倫理を説いたときと同じように、21 世紀の私たち一人ひとりに対しても問われてきていると私自身は考えております。以上で発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。（拍手）

第5回宗教と環境シンポジウム　パネルディスカッション

いのちを活かしあう新たな文明原理の探求と実践

パネル発表者+（モデレータ）阪南大学 国際コミュニケーション学部教授　村田充八

村田：ご紹介にあずかりました阪南大学の村田です。今回の宗教と環境シンポジウムでは素晴らしい講演とパネル発表を戴きました。お礼を申し上げますとともに、ここで更に学びを深めることができればと願っています。まず私の方から、本日ご登壇の先生方のお話を一言ずつにまとめさせて戴きます。

主催のRSE代表である竹村先生は、環境の問題を考えるとき、「いのち」の世界を真剣に議論する必要があるとお話し下さいました。開催校をお願いした高野山大学の藤田学長は、いのちを大切にする教えを1200年前の弘法大師の教えの中から導き、そこに大学が作りあげられた経緯をお話し下さいました。基調講演をお願いした高野山真言宗管長で金剛峯寺のお座主であります松長猊下からは、インド・中国・日本の先人たちのいのちについての深く掘り下げた探究が提示され、私たちにとっての開眼となるご講演を戴きました。パネル発表に移りますと、北川先生からは、暦と季節感を大切にした江戸時代の暮らし方の中には、環境を内面化し、祈り、感謝する世界があったことを教えられました。また、小原先生は「物語」の意味と力を考え、今後の環境問題の議論の中に何を構築すべきか、世代間倫理の問題も含め宗教が十分に教えてくれると示唆して下さいました。最後にご発表の金子先生は、シュヴァイツァーが唱えた生命の畏敬の倫理と、そこから導かれる現代のわれわれの責任倫理の方向付けについて教えて下さいました。

ここに3人の先生方へのご質問を戴いておりますので、お一人ずつお答え願います。また、時間がありましたらフロアの方からも手を挙げて戴きまとめていきたいと思います。

最初に小原先生に福山市の村山先生からです。なぜ西洋の方が環境問題への取組みが進んでいると思われますか？ なぜ日本の取組み意識が低いのでしょうか？ というご質問をいただいております。よろしくお願いします。

小原：日本においてなぜ意識が低いか、環境運動が十分でないか、本当に考えていかねばならない問題だと思います。ところで、一方でしばしば、日本には自然と人間とが共生する文化があると言われます。ただ、その割には具体的な環境運動の実践例は多くないのです。そうしたことに関連すると思われる危機感を、北川先生のお話の中からもお聞かせ戴いたと考えます。伝統的文化と了解されているものと実際とのギャップをどう埋めていくか。これは考えなければならない課題です。そもそも、なぜ環境意識が低いのか。これは環境問題だけではなく、おそらく社会運動全般についても言えると感じます。社会的な関知の度合いが非常に下がってきていて、環境問題もその一つになるのかもしれません。現状をみると、個人が自分の好きなものだけ消費し、満足して生きていくという次元だけで、他者のために生きるということに喜びを感じるといった社会に日本はなっていないということです。ここがまず根本的な問題として指摘できそうです。他にも説明の仕方はいろいろあると思います。

最初の質問についてです。日本ではキリスト教世界あるいは西欧世界を、人間中心主義とか自然破壊的とか評価してきたのですが、それにもかかわらず実際には非常に裾野の広い環境運動が既に19世紀の末ぐらいに西欧世界にできています。これに関してルーツはいくつかあります。一つは当然、宗教的なものです。しかし宗教と関係なく、自然の美しさとか自然そのものを保全しようとする世俗的な流れもあります。それも既に19世紀ぐらいには立ち上がっています。

まずキリスト教に引きつけて申します。ステレオタイプな見方として、人間中心主義であるとか、人間が自然を支配してかまわないという教義なので環境破壊が進んでしまったと主張されることがあります。しかし、そういうキリスト教世界の中からさきほど金子先生が言われたようなシュヴァイツァーが誕生しております。シュヴァイツァーの遥か以前には、動物の守護聖人とされるアッシジのフランシスが動物への愛、自然への愛ということを語りました。ですから、必ずしも人間中心主義一本やりではありません。また、以前、村田先生がご発表になったタイトルの中に、委託をうけたスチュワード（管理人）として生きるということがありました。これは聖書のなかの基本です。このことをもう一度見直すことで、単に自分の好き放題してよいのではなく、むしろ管理人としての責任を自覚することからキリスト教社会に一定の変化が起こりました。自分たちが自然を単に消費し、

それを食べ残したり使い尽くしたりしたあと放置するのではなく、神から委託された自然にどう向き合うかという責任倫理がキリスト教社会には非常に強くあるということです。おそらくこれが日本と対比できるところであると思います。日本においては人間と他の生命種との関係は、確かに並行的、ないしは横並びかもしれません。その中で、却って人間として果たされねばならない責任感がどこか薄らいでしまってはいないか。このことは逆に問えるのではないかと思います。

なお、他の生命種と並行的な感覚という点に発する自然への愛、動物への労りはヨーロッパの文化の中にもあります。現在京都の国立博物館で鳥獣人物戯画の特別展示が行われています。あれはなかなか面白いです。日本人の持つ独特な人間・動物の垣根を越えた感覚的世界が描かれています。これは松長猊下がお話しになったことを視覚化していまして、その鳥獣人物戯画は京都の高山寺にずっと所蔵されておりました。高山寺は自分たちと非常に近いということで、アッシジのフランシスの教会と姉妹協定を結んでいるのです。ですから、そういう洋の東西を超えて連携できる点はどこか、といったテーマでこうしたシンポジウムを通じ積極的に考えたらどうかと私は思います。

村田：ありがとうございます。金子先生宛ての質問に移ります。関西大学の宮本先生です。人工物にもいのちがあるというのがシュヴァイツァーの考えだとすると、原発にもいのちがあるのでしょうか、ということです。同じ趣旨のご質問も出ていますので、これは後で三人の先生方に答えていただきます。お名前はＫ氏です。宗教が私たちの心を導く教えであるならば、宗教界が統一見解として日本の原発推進維持政策に対して明確にNOと言うべきではないでしょうか。イデオロギー的な反対でも科学的判断による反対でもなく、心の問題として反対を表明するということですか、というご質問です。金子先生から小原先生、それから北川先生、後でも質問がありますが簡単にお答えください。

金子：ご質問をお寄せ下さりありがとうございます。短く答えたいと思います。理屈からすると確かに原発にいのちがあるのかと聞かれたら、あると答えざるを得ません。しかし問題の本質はそこにはなくて、エネルギーを作る仕組みとしての原発が、実は多くのいのちに対し犠牲を強いる存在でもあるということです。人間の英知で作られた原発ではあるものの、それがもたらす桁外れに大きい破壊力を考えざるを得ません。そのことによって人間は人間性を超えて超人になってしまった。だから本来の人間性を取り戻すためには、そうした超人的な電力資源発生装置である原発でなく、もっといのちに優しい、環境に負荷をかけない再生エネルギーの装置から電力を取り出す仕組みを作っていくべきだと思います。いのちということで比較をするなら、原発の持っているいのちよりも再生エネルギーを創造するいのちに人類はこれから力点を置いて考えなければいけないはずです。

小原：原発に対し一致団結してNOと言うべきではないかという点に関して、個人的に私もNOの立場です。仏教界も、そしてキリスト教界も、組織としてNOと言う声明は出されてきましたから、おそらく宗教界としてそうした方向を持っています。それは各新聞に取り上げられ注目されています。ただ、私が強調したいのは、ある事柄に対してYES・NOをはっきり言えば終わりにできる、というのではなく、先ほど申しましたが、むしろ問題をしつこく考え続けていくため、つまり人間が逡巡しつづけていくためのエネルギーを宗教界は提供すべきだと考えています。もしもすっぽりとYES・NOにはまって思考停止させるような役割を宗教界がとるとするなら、それは方向としてはまずいと思います。エネルギー政策は絶対に簡単ではありません。ですから、とにかくこれは簡単ではない、難しいから考え続けよう、という刺激をどうやって社会に与え続けることができるのか。これが私は宗教が語る物語の役割であると考えます。

北川：言おうとしたことを小原先生にすべて言われてしまいました。現在、何事もスポーツのように勝ち・負けを決めるような雰囲気になっていると思います。原発についても勝ち・負けではなく、まだ違う考え方を探すべきかもしれません。密教の場合は、たとえば武器を法具に切り替えてしまいます。たとえば刀は武士にとって魂と言います。本来は人を殺す道具がそうではなくなる。物を変えてしまう。ですからある意味原爆も含めて原発も何かそういう方向へ思い切り切り替えて何かにしていかないと、ただYES・NOだけでは事が収まらないと私も思っております。もちろん、私は原発には反対の立場です。

村田：ありがとうございます。入り口で配布された封筒の中に宗教研究者エコイニシアティブ第５回シンポジウムの環境宣言文が入っています。最後に採択したいと考えていますが、原発の件は、それにも深い関係があると

思います。
　さて、小原先生宛てにこういう質問がきています。出来事や記憶を継承する作法という伝統宗教を掲げられましたが、ナショナライズされている神話や民間伝承からも新しい文明論的な物語の構築に際して学ぶことが多いのではないでしょうか。関西大学の宮本先生です。小原先生どうぞ。

小原：まったく同感です。ナショナライズされた、というのは現代的表現ですが、私たちの国の成り立ちや文化形成の起源を問う物語はたくさんありますし、それらは大切にすべきものです。もちろん日本において日本の古典が大事にされるように、他の国は他の国のものを大事にする中で、それぞれのアイデンティティが形成されていくと思います。そこで問題となるのは、歴史を振り返ると時の権力者がそれを政治的に利用する場合があるということです。実はヨーロッパにはそういう例がたくさん見られますし、日本にも近代に近いことがあったかもしれません。本来、神話や民間伝承の中の物語というものは、近代の国民国家を正統化するために作られたものではありません。ですから、むしろ私たちが言うお国とか、自分たちのローカルなコミュニティがどのように出来てきたのかという、もっと素朴なレベルの共同体意識を丁寧に育てていくためのエネルギー源です。したがって、それを近代の国民国家における国家意識を強化するために使うことに対しては、私は慎重であるべきだという立場をとります。神話や民間伝承の物語自体を私は非常に貴重であると思います。

村田：ありがとうございます。最後にフロアからの質問を１つ。生長の家の山岡先生からです。これも小原先生です。イスラムのなかで環境問題に取組む視点とはどのようなものがあるのでしょうか。コーランから導き出せるものがありましたら教えてください、ということです。

小原：これについては現実を端的に示したいと思います。イスラムといってみなさんがまず思い起こす地域は中東の産油国だと思います。そこではたくさん石油を産出しています。そういう意味では温暖化の原因になる石油を売ることで世界経済に貢献している国々があるのですが、環境意識は決して高くありません。実際サウジアラビアなどは石油をたくさん産出しつつ、国内に日本の協力で原発を作ろうとしています。中東で今後原発を持つ国がだんだん増えてくると思います。ですから、その限りにおいて中東は今あまり意識が高くないのです。もっともサウジアラビアは地震国ではないため、その点は大きな問題はないのかもしれません。しかし日本並みの地震国であるトルコにまで、日本政府は原発を売り込み商談が成立しました。ですから近い将来原発ができます。私はトルコに何回も行き、日本政府は売り込んでいるが原発は危ないと言ったりしたものの、危機意識を持っている人は意外と少ないです。それが現実です。
　では、イスラムには環境意識がまったくないのか、というとそうではありません。もう一つ別の例を挙げます。インドネシアのジャワ島の話です。ジャワ島でもかつて日本の資本が入る形で原発建設の計画がありました。3、4 年ほど前のことだと思います。いよいよ原発がジャワ島に作られるといったとき、地元のイスラム団体、特に若者が中心になって反原発運動を立ち上げました。そして最終的に原発誘致を撤回させています。ここには面白いからくりがあります。インドネシアのイスラムというのは純粋という言い方は不適切ですが、中東の純粋なイスラムと若干違います。どう違うかというと、ジャワにおいては非常にアミニズム的な自然理解が彼らの信仰のなかに溶け込んでいるのです。純粋な一神教ではなく、アミニズム的な、つまり自然は尊く、それは自分たちが大切にすべきものだという感覚も加味されています。同時にイスラム的な視点から、イスラムの法学者の宗教令をファトワーといいますが、このときはそのファトワーが出されました。原発のエネルギーは人間にとって悪しきものである、というファトワーのおかげで計画を結果的に撤回させたのです。ですから、これはすごく注目すべき出来事としてときどき参照しています。イスラム世界においてはトルコとは対照的な立場があります。イスラムの立場、あるいは自らのローカル・カルチャーをうまく取り込みながらエネルギー政策に対して積極的な提言した例があるということを示しておきたいと思います。

村田：これでフロアからの質問にお応え戴きました。どなたか挙手をして下さってもよろしいのですが。…もしなければ私のほうから質問させて戴いてもよろしいですか。ありがとうございます。
　北川先生に質問させて戴きます。その後、金子先生にも質問させて戴きます。北川先生は今の環境問題を考える際、まさに絶望だと仰っておられました。しかし、その絶望の中にも江戸時代の文化を振り返ってみるとき、日本の社会の中に存在していた環境問題への対応、暦や歳時記の季節感を非常に大切にするといった生活手法の視点にも私たちは目を向けるべきだと、それこそがディープエコロジーに対するものの考え方だと仰って下さい

ましたが、その辺りいかがでしょうか。

北川：環境問題に対して多分たくさんの理屈があると思います。ところが、理屈に実践がまったく伴っていないのが現実の社会ではないでしょうか。そうすると、いくら伝えたところで伝わらない。ならば何が必要なのか。それは天海僧正がやったような荒々しい魂を切り替えるため身体をもって教えていくやり方、すなわち儀式化ということが非常に大事なのではないか。ただ、日本の場合は危険性があります。それは何かというと、形式主義に堕ちるということです。

たとえば皆様にお尋ねしたいのですが、5月5日は何の日ですか。いちおう今は「子供の日」です。でも法律のなかには「子供を見守りながら、母に感謝する日」と書いてあります。ところがそれだけではありません。もともと子供の日は「端午の節句」です。でも「端午の節句」は、男の子の節句だと皆が思っているのです。でも、違います。本当は何をする日かというと、梅雨の前に田植えをしますね。それに対して女性が身を清める、女性のための日が本来の姿なのです。梅雨を迎える前の日なのです。ところが今は完全に中身が消え、形だけ残った状態なのです。それを復活させることによって一人ひとりの人間のなかに季節感というものがグッと入ってくる。そうすると自然の中で生きなくてはいけないという感性が増してきます。感性なのです。科学技術者がその感性を科学技術にもっていってくれると、自然と一体化した科学技術が見られていくのではないか。私は本当に正直いって絶望していますが、でも1パーセントでも可能性があるのなら、さきほど言いましたように200年先を見つめてそういう季節の行事というものをお寺なり神社なり、それからもちろん教会なり、地域に合わせた、そしてそれぞれの宗教に合わせたものをやっていくべきではないかと感じています。いま私の寺では実践しております。それから密教では、とくに真言宗の場合は形があるものに大乗仏教の精神を込めていくのは得意なので、そうしたことができやすいのです。それを他の宗教でもやって戴けると素晴らしいのではないかと思います。

村田：金子先生に質問です。金子先生の「シュヴァイツァーの倫理的神秘主義の構造と展開」を拝読しました。やはりシュヴァイツァーはプロテスタントの神学者として、神・人・世界に対して非常に聖書的な原理を押さえていたのだと思います。そこで、御本の中に書かれた「シュヴァイツァーの環境問題に対する視点」の中で重要なポイントとなる「いのちを活かす」は、彼にとってどんな展開の中で学ばれ実践されたのか、少し教えて戴けますか。

金子：ありがとうございます。これはシュヴァイツァーの自然理解、とりわけ「いのち」観がどう形成されたかに関連するでしょう。彼のライフヒストリーをずっと辿っていけばおのずと見えてくるのですが、時間の都合で結論だけ申します。シュヴァイツァーは、私たちがいのちという言葉でイメージする自然観と少し違った自然観を持っていました。というのは、実際の自然の世界は、生きようとする生命同士の修羅場の世界であるというのが彼の認識でした。私たちはジャングルやグレードバリアリーフのサンゴ礁のような美しく豊かな色彩の自然を見て、本当に生き物の楽園だと思うわけです。しかし実際にその中に自分が一匹の生き物として入ったなら、それこそ食うか食われるかという弱肉強食の戦場がリアルに展開しているのです。その中にあってなお、人間として自分以外のいのちに対する愛情といいますか、尊重の念が起こってくるのだと。さらに、実はそこのところが人間のいのちと他のいのちの違いでもあると非常にデリケートな言い方をしています。その上にもう一つデリケートな言い方をしています。それは人間のいのちにどうして生命の畏敬が生まれてきたのかというところで、彼はキリスト教の愛の倫理を結び付けているのです。ところが愛の倫理は、キリスト教の伝統の中では人間に対する愛、神に対する愛として、基本的には神と人間に対してしか用いられません。アッシジのフランシスは特例です。シュヴァイツァーは、それを自然界のあらゆるいのちある存在に対して用いようとしたということなのです。

村田：ありがとうございます。私は予稿集にパネルディスカッションにあたっての三つのポイントを書かせて戴きました。第二のポイントの中に、「これから宗教がどういう文明原理を構築し、どう具体化していくか問うこと」としています。これに関連して、宗教・研究者エコイニシアティブの環境宣言の中ほどを見て戴きます。

竹村先生が草案を作って下さり皆でまとめたのですが、「私たちがこれらの問題を、今、放置しておいたら、地球という星は次世代以降の〈いのち〉にとってまったく劣悪となり、未来の人々に生活の困難と苦しみを与えることになってしまいます。このときにあたり、私たちは協力して、以下の対応を同時に推進していくべきでしょう。①科学・技術の進展による解決（省エネ・グリーンテクノロジーの開発と導入）②社会システムの変換による解決（低炭素・循環型社会への移行）③ライフスタイルの転換による解決（人間の欲望の制御等）以上のいず

れの対策も、自己の〈いのち〉の使命の深い了解があればこそ、実践されていくに違いありません。」とあります。
　そこで私たちが新たな文明原理の探求と実践を考えるとき、具体的に私たちはどのようにこの宣言を活かしていくか。あるいは実践していくか。この点について簡単に小原先生、金子先生、北川先生お答えください。端的にお願いします。

小原：①、②、③とありますが、循環型社会の構築という点では、北川先生がお示し下さったように江戸時代の伝統から学ぶことがたくさんあると思います。ただ、宗教の世界において一層注目したい事柄としては３番目の人間の欲望をどう制御するかということでしょう。なぜかと言えば、現代は科学技術の時代といわれます。技術が進歩し、それが人間の欲望を刺激し、より新しいものが欲しいと思うわけです。私もその一人かもしれませんが、新しいスマホが出たり、アイフォンが出たりしたら欲しくなる。若者はみんなそうです。技術が進めば人間の欲望が拡大し、拡大した欲望がまた新しいマーケットや製品を生み出していきます。これは欲望と技術のスパイラル構造です。つまり欲望と技術が絡み合いつつどんどん上昇していく大きな渦巻きのなかに私たちは引き込まれています。大人はまだ「我慢しよう」と距離を取ることができます。でも、今の若い世代は気の毒です。新しい商品を手に入れることは、インターネットで学ぶ機会など様々な可能性もある一方で、同時にソーシャルネットワークが原因で子供同士が命を奪いあうような事件も報道されています。ですから世代を問わず既に巻き込まれてしまっているこのスパイラル構造の中にあって、宗教者たるもの何を言い得るかが問題となるでしょう。「足るを知る」の一言で済むかもしれませんが、新製品情報の流れに溺れず、自制的に目的地へ泳ぎ着ける精神の在り方というか作法、あるいはむしろ、そこから自由になることの喜びを宗教者としてきちん伝えられるかどうかでしょう。それが可能となる中に人間と自然との関係が重要な役割を果たすのではないかと思います。私たちの現代生活は、人間と自然よりも人間と機械、人間と技術によりつくられた製品との関係がどうしても生活の中心を占めてしまいがちですので、機械や技術を一旦生活の場から外し、自然と人間との関係を繋ぎ合わす作法を宗教は考えねばならないと思います。

金子：私も小原先生と同じく、この①、②、③とある中でやはり３がポイントになると思います。ライフスタイルの転換による解決。ただ、括弧の中に人間の欲望の制御等とあるのが気になります。「制御」に引っかかるわけです。確かに人間は欲望をもっていまして、素朴な人生肯定と言うか、シュヴァイツァーの言葉を使いますとやはり私たちも「生きんとする生命」ですから、幸せを求めてより快適により恵まれた社会を作ろうとする。それはその通りですが、ただ、哲学的人間学のなかに宇宙における人間の地位という問題設定の仕方があります。宇宙というと話が拡散してしまいますが、これを地球における人間の地位という具合に言い換えるなら、地球は有限である、しかし人間の欲望は無限に開発されるということなのです。そこを考えると、欲望の制御という発想ももちろん大切ですが、欲望の価値転換というものも必要ではないか。そしてそれを促すのが宗教の役割だと思います。私は、その方向性というのは松長猊下がお話しになられた大欲精浄だと考えます。他者のいのちへの献身ということを、自分自身のいのちの完成につなげていく仏教的な、超越的な欲望ということに転換していく。これが宗教者が地球環境問題をリードしていく際の一つの考え方だと思います。

村田：ありがとうございます。北川先生お願いします。

北川：私は少し見方を変え、この３つというより全体を含む視点についてお話ししたいと思います。私はかつて県下最弱の高校のハンドボール部コーチをしていました。引き受けた当初に、全員がやりたいというポジションでやらせてみたらまったく駄目なのです。改めて、一人ひとりの個性を見たあと全員の配置転換をしました。すると結果的に 10 か月で県のベスト 4 に入りました。これは実はさきほどの曼荼羅にもいえると思いますが、一人ひとりの仏様には一人ひとりの個性があります。その個性を活かす位置に置くと本当に世界としてはそれぞれ有機的につながってバランスがとれていきます。欲望もまた、そういう側面があるのかもしれません。ただ、欲望を否定するだけですと、松長猊下も仰せのとおり欲望の暴流を止めたことで大変な大洪水さえ起こしかねない。われわれが川でそういうことを教えてもらえると思いますが、それをどうやって上手に方向転換していくのか、配置転換していくのか。ここでいちばん求められるのが宗教者の役割なのではないか。そういう意味でこれは社会システム、それからライフスタイルの転換ということに繋がるのではないかと思います。やはり宗教家が一人ひとりの信者、一人ひとりの檀家、関わりのある人たちに対して何かを示していく。もちろん自分も含めてなのですが本当の意味での個性、その個性を見つめるからこそ平等になっていくのではないかと思います。少し言葉

足らずで申し訳ありませんが、以上でございます。

村田：ありがとうございます。パネルディスカッションにあたり先生方のご講演等おうかがいしまして、第3番目に私は宗教はやはり世代間倫理の視点をどのように発信していくかということが非常に大事だという気がしております。それは他者を排除するのではなくて、今ある状況を深く憂いて反省し、そして今の状況を変え、なんとか持続可能にさせていかなければならない、何十年後の世代に今の環境を伝えていかなければならない。こういうことを思いましてその3番目に世代間倫理の視点が大切だということを書かせていただきました。昨日、松長猊下の新しい高野山の本を拝見しましたら、こういうことが初めに書かれていました。失礼とは存じますが少し読ませていただきます。11 ページの終わりにこうあります。「真言密教の教えでは、日常の社会生活の中でも宗教的な信仰ないし儀礼の上でも、異質的なものあえて排除しない。たとえ思想や信仰あるいは生活習慣を異にしていても、対立し敵対することがない。意図的にあるいは無意識のうちに異質なものを包含し、自分の側に同化融合しようする傾向が強い。」
私はここを読みました際、これはいのちを活かし合うという新たな文明原理に非常に参考になる部分ではないかと思い、本日のシンポジウムのまとめに使わせて戴こうと考えました。時間がまいりました。まだまだ十分に議論もできておりませんが、これでディスカッションを終わりたいと存じます。プログラムを見て戴きますと、このあと副代表の山本先生がご挨拶されますので、そこでまた纏めて戴けるかもしれません。3人の先生方、ありがとうございました。（拍手）

第5回宗教と環境シンポジウム　閉会ご挨拶

東京大学名誉教授　山本良一

人間活動が温暖化の原因

私の役目は大変シンプルだと理解していましたが、若干時間を頂戴したようです。

まず、はじめに真言宗管長松長有慶猊下、また高野山大学、そしてご来場の皆様にこのようなシンポジウムが開催できましたことを心より感謝申し上げたいと思います。参加者の人数は若干少なかった印象はありますが、当代一流の学者と関係者が集い、このような議論ができたことは大変意義が深かったと思います。また、私から代表の竹村先生に第5回シンポジウムの宣言を出すことについてお願いしましたところ、「ぜひ、やりましょう」ということになり、お手元のような案が今出来上がりましたことも大変意義深いことと考えております。

私は今ご紹介のありましたように、このシンポジウムではまったく異質的存在ではありますが、密教的にいえば私のような科学者も当然こういう議論に入って宜しいのではないかと思います。われわれ科学者は、必ず精密科学の数字で定量的にものごとを考える習慣がついております。私の頭の中はすべて数字で構成されています。たとえば今日一日を考えますと、全世界で約35万人の赤ん坊が生まれ、約15万人の方が亡くなられて、結局一日で20万人ほどの人口が増えます。私たちは今日生まれた35万人の赤ん坊を育て、彼らに職を与え、住居を用意し、道路を建設し、いろいろやらなければいけないわけです。

一方、空前絶後の経済の成長が起こり、膨大な化石燃料を使うため今日一日に全世界で二酸化炭素だけでも9,500万トンという想像を絶する量の温暖化ガスが空気中に放出されています。始末が悪いのはそのうち10パーセントから15パーセントは1000年から1万年経っても実質的に空気中から消えません。したがって現在起きている地球温暖化はたとえ明日この9,500万トンを0にする削減を行ったとしても、あと数千年以上にわたり温暖化が継続していくという恐るべき状況にあるわけです。この地球温暖化も温暖な気候というと大変良いことが起きているように感じられるのですが、端的に申し上げて地球の表面に余分の熱エネルギーが蓄えられていくということです。その90パーセントは海が吸収しています。今日一日で全世界の海に吸収される余分な熱エネルギーは、広島型原爆の爆発エネルギーの40万発分なのです。空前絶後のエネルギーが今日一日で世界の海に吸収されます。この余分なエネルギーこそが、まさに異常気象の根本原因になっているわけです。

温暖化の加速は北極、南極圏ではじまっている

それについて膨大な証拠が上がってまいりました。つい最近、この7月8月に発表されたデータによれば北極のグリーンランド、それから南極の西南極大陸では急激に氷が崩壊して海面水位の上昇につながっています。ヨーロッパの人工衛星の精密観測により、1年間に南極・北極で崩壊する氷の総量がなんと4,500億トンにのぼることが分かってきました。われわれ科学者の心を震え上がらせるようなデータです。海面水位の上昇は、今世紀中に数メーターを覚悟しなければいけません。さらにアメリカNASAの人工衛星の観測で新たに分かった事実があります。この氷が解けた結果、人工衛星から北極圏を見ると太陽光線の反射が減っています。この30年間でなんと8パーセントも反射率が減少しました。反射率が減少するということは、太陽光線が北極海に吸収されているということを意味します。それによる年間のエネルギーの吸収量は、全二酸化炭素によるエネルギー吸収量の25パーセントに相当すると報告されました。これによってもわれわれ科学者は色を失っているわけです。すなわちこれが何を意味するかといえば、もうあと数十年で北極圏における温暖化の加速、氷の減少、さらにメタンガスの噴出とで温暖化は自動的に進行していくからです。つまりわれわれが二酸化炭素を減らそうが増やそうが、そんなことは問題にせずに北極圏だけで全地球の温暖化の加速化が行われてしまうという、いわば温暖化の暴走の危機が近づいているということであります。

ポイント・オブ・ノーリターンが見えてきた

そういう中で、いま生物の大量絶滅が起こっているわけですが、その根本原因もこの15年間の国際共同研究で明らかにされました。人間活動があまりにも急激にグローバルに増えてしまったと。すでに人類は地球表面の43パーセントを支配しています。雪や氷に覆われていない土地の43パーセントを人類が使っているわけです。

われわれの農産物を生産するための土地の総面積は、すでに南アメリカ大陸に匹敵しています。更に私たちの食肉を生産するための牧畜地の総面積は、アフリカ大陸に匹敵すると想定されています。このままのスピードでいくなら、2025 年にも人類全体が支配する地球の土地の総面積は全体の 50 パーセントに達します。そこがおそらくポイント・オブ・ノーリターンであろうと。もう引き返すことのできなくなるところに来ていて、大量の生物絶滅が起きてしまいます。生物絶滅は非可逆的なプロセスです。したがって、科学的な観点からいってもこれは人類の歴史のみならず地球の歴史始まって以来、古今未曾有の危機にいま人類文明と地球生命圏が直面しています。これが我々科学者の認識であります。

どうすれば問題を解決できるか。竹村代表がお書きになっているように人類は毎日 9,500 万トンという膨大な二酸化炭素を出していますが、これを 2050 年までに全世界で半分、先進国においては 80 パーセントぐらい減らさなければいけない。さらに今世紀中には 0 にしなければいけないという、激しい文明転換の必要性を説く科学者の意見があります。

宗教・哲学・倫理の責務

そこで今、どういうことが世界的に問題になっているかといいますと、科学的な認識、それから科学的な対策、対処法が提示されればされるほど、それに対する反発も比例して増大します。要するに科学的知見を否定します。あるいは科学的知見は不確実だといって対策を先延ばしにします。これが今の国際社会の現実であります。われわれは真実から目を背けて科学的な事実を否定する。あるいは不確実だと言い、あるいは科学者の悪口を言うという情けない状況であります。これをどう打開するか。そこでまさに宗教、哲学、倫理、とくに宗教界の力をなぜ発揮しないのかと考えるわけです。もちろん多くの動きがありますが、皆様もご存じのように気候変動、資源問題、生物多様性の問題については国連に三つの正式の科学者の機関（パネル）があり、定期的に報告書を出して国際社会に提言をしているわけです。私は、なぜそうした国際的な機関として宗教、哲学、倫理の分野の同様なパネル、すなわち宗教パネルあるいは倫理パネルを国連内に設置できないのか、そこで定期的に正式の提言を取りまとめることができないのかと大変不満に思っています。

そこで今回、このような宣言案をおまとめ戴くことができました。これを絶好の機会と考えております。来年の 4 月 6 日にはダライ・ラマ法王がまた来日される機会があります。私も含めてこの宗教と環境の問題について議論するシンポジウムが開催される予定になっております。私は是非このダライ・ラマ法王にお願いしたいことがあります。それは日本の宗教界の提言を受けてダライ・ラマ法王からフランシス法王に共同宣言を申し入れていただいて、是非来年の 4 月以降に国際社会に直ちに行動に移らなければ取り返しがつかない、単に地球のみならず銀河系全体を見渡しても、われわれはまだ外の知的文明に遭遇していないわけですが、現在のわれわれの地球上における文明、あるいは地球生命圏は極めて貴重です、これを滅ぼしていいのかと、それを世界の政治指導者に呼びかけていただきたい。

エシカルオリンピック開催と宗教パネル創設を目指して

こう申しますのは、ご存じのように来年は極めて重要な年になります。すなわち来年の 12 月にはフランスのパリで国際会議が予定されています。そこで 2020 年以降の地球温暖化防止の新たな枠組条約の基本が決まります。さらにはミレニアムデベロップメントゴールのあとの、持続可能な開発目標も国連でとりまとめられる予定になっています。

高野山におかれましても開創 1200 年をお迎えになられるわけですが、弘法大師空海の生命哲学、あるいは日本の密教思想が基本になったような取組みを、ぜひ世界にご発信して戴きたい。

私自身はいま何をしているかというと、2020 年の東京五輪が大変よい機会であると考えています。すなわち 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックをエシカルオリンピック・パラリンピックにしたい。そのためには従来、環境配慮だけを言ってきたわけですが、社会的な配慮のアピールも必要になります。人権問題、途上国問題、貧困問題がそれです。開催地の東京を、そうした問題にも配慮した環境配慮、社会的配慮のモデル都市にしたい。だから東京に世界第一のエシカルタウンになってもらい、それを活動目標にしたいということで日本エシカル推進協議会を設立しました。正式に政府およびオリンピック委員会にこのエシカル五輪の実現の要望書を提出した次第です。いずれにしても、もはや科学者とか技術者とか、あるいは宗教者とか、そんな区分けはまったく用をなさない無意味な時代をわれわれは迎えているわけで、私たちはありとあらゆる能力を結集し、今この文明および地球生命圏の危機を突破しなければいけません。かように考えております。幸い松長有慶猊下におかれましては今日のご挨拶では駆け込み需要と仰せになっておられましたが、松長猊下にそうしたリーダーシップを

とって戴きたいと私は密かに思っていました。そうしましたところ、一昨年には天台宗、神社本庁等に呼びかけられ、伝統宗教から日本の社会に向けたメッセージが発信されました。松長先生にはさらにご健康に留意され長生きして戴き、ぜひとも日本でまず宗教パネルを作って世界に範を示して戴きたいとお願いして私の閉会の挨拶に代えさせて戴きます。本日はどうも長時間に亘り有り難うございました。（拍手）

このあと宗教・研究者エコイニシアティブ第５回シンポジウム宣言には満場一致の賛意が表され採択されました。

宗教・研究者エコイニシアティブ第５回シンポジウム　宣言

私たちが住む地球の自然環境に、深刻な危機が訪れています。このことは、近年の国連の「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）」の討議、2013 年 5 月に出されたアメリカを中心とする 3000 名を超える多くの科学者の声明　“Maintaining Humanity's Life Support Systems in the 21st Century“（「21 世紀における人類の生命維持システムの持続に関する科学的コンセンサス」）、今年 8 月末の NHK 報道番組「巨大災害、地球大変動の衝撃」等に明らかです。

また、自然環境の危機には地球温暖化のみならず、海洋の蓄熱に基づく気候変動、生物多様性の縮小、森林地帯の減少、水や土壌等の汚染、環境の悪化を進めるエネルギー生産等、多くの問題が横たわっています。

私たちがこれらの問題を、今、放置しておいたら、地球という星は次世代以降の〈いのち〉にとってまったく劣悪となり、未来の人々に生活の困難と苦しみを与えることになってしまいます。このときにあたり、私たちは協力して、以下の対応を同時に推進していくべきでしょう。

① 科学・技術の進展による解決（省エネ・グリーンテクノロジーの開発と導入）
② 社会システムの変換による解決（低炭素・循環型社会への移行）
③ ライフスタイルの転換による解決（人間の欲望の制御等）

以上のいずれの対策も、自己の〈いのち〉の使命の深い了解があればこそ、実践されていくに違いありません。

私たち、第５回 RSE シンポジウムのために高野山に集った宗教者・研究者は、その宗教の違いにかかわらず、自己の〈いのち〉を神・仏等、自己を超えるものからの授かりものと認識し、地球環境もまた神・仏の恵みと受けとめて、その十全な維持とよき性能の発揮にひたすら取り組む使命があると考えています。この立場から相互に協力・連携して、「変えようくらし、守ろう地球」を合い言葉に、自己の生き方を見直し、社会のあり方の改革に参画し、地球のサステイナビリティを実現する科学・技術の開発は支持し、その成果をくらしに取り入れていくことを宣言します。

平成 26（2014）年 10 月 25 日　於・高野山大学

The Religious and Scholarly Eco Initiative (RSE)

5th Public Symposium on Religion and the Environment

Changing the Way We Live and Protecting the Earth:

The Pursuit and Practice of a New Principle of Civilization that Promotes Life

October 25, 2014
Koyasan University

@ the headquarters of the Shingon Denomination on Mt. Koya, Japan

A grave crisis has descended onto the natural environment of the planet which we live. This has been underscored by the recent debates of the United Nation’s Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC), the declaration called “Maintaining Humanity’s Life Support Systems in the 21st Century” made by

over 3,000 scientists mainly from the United States in May 2013, and the report of "the major disaster and impact of this great change" by the Japanese national broadcasting station, NHK, at the end of August 2014. Global warming is not the only danger to the natural environment. There are also a host of problems that lay before us, such as the warming of the earth's oceans which is the basis of climate change, the reduction of biological diversity, the decrease of forested areas, the contamination of water and soil, and energy production that promotes change in the earth's climate.

If we allow this situation to continue to run its course, life for the next generations onward on this star called planet Earth will assuredly become compromised, and we will bequeath suffering and hardship on the lives of the people of the future. In this way, each of us in the RSE network is working together to promote cooperative action in the following areas:

1) the advance of scientific and technological solutions, such as the introduction and development of low energy products and renewable energy.
2) the transformation of our social systems, such as transitioning to a low carbon society of cyclical production and consumption.
3) shifts in lifestyles, such as the restraint of human greed.

With a deep understanding of individual, personal duty, we will undoubtedly engage in the above measures.
We religious professionals and researchers who have assembled here on Mt. Koya for the 5th RSE Symposium, despite the differences in our religious faiths, recognize our own lives as a blessing from God and Buddha who transcend our existence. We also understand that the natural environment itself is a blessing of God and Buddha. With such mutual understanding, we feel that we must earnestly undertake the mission for the positive maintenance and effective performance of these blessings. Therefore, we are engaging in cooperative action and solidarity. With the motto, "Changing the Way of Living and Protecting the Earth", we are re-examining the way each of us live, participating in social reform planning, supporting the development of science and technology that can serve the sustainability of the earth, and adapting the results in our daily lives.

The Religious and Scholarly Eco Initiative (RSE) was created in May 2011 by a collaboration of religious professionals and scholars to confront the environmental crisis. It has as a stated goal "the harmonization of humans and nature and the construction of a new principle of civilization." It also seeks to promote the adoption of clean energy, rather than fossil fuels or atomic energy that put a burden on the environment. In order to further advance these principles and goals, RSE members from Buddhist temples, Shinto shrines, and Christian churches in Japan are installing solar energy generating equipment at their facilities. Under the banner of RSE, they are demonstrating their collective capacity on the Religious Based Solar Power Generators homepage.

RSE Officers & Contact:
Dr. Makio Takemura (Representative) President, Toyo University
Hiroki Ogasawara (Coordinator) Managing Director, Religious and Scholarly Eco- Initiative (RSE)
3-9-5-302 Yabe, Chuo-ku
Sagamihara City
Kanagawa 252-0232
JAPAN
Tel: 81-42-707-1440

The Religious and Scholarly Eco Initiative (RSE)

5th Public Symposium on Religion and the Environment

Changing the Way We Live and Protecting the Earth:

The Pursuit and Practice of a New Principle of Civilization that Promotes Life

October 25, 2014
Koyasan University

@ the headquarters of the Shingon Denomination on Mt. Koya, Japan

Summary
On Saturday October 25th, 2014 from 1:00-5:00 p.m., the Religious and Scholarly Eco Initiative (RSE) held its 5th Public Symposium on religion and the environment at the Matsushita Kodo Reimei-kan Hall at the headquarters of the Shingon denomination on Mt. Koya in Wakayama Prefecture, Japan. While RSE acted as the main sponsor, the Toyo University International Research Center for Philosophy (IRPC) served as a co-sponsor with Koyasan University providing additional support. The focus of previous symposiums had been to introduce the specific environmental responses and their results of people from different religious organizations. However, this time there was slightly more emphasis put on an inquiry into the principles of civilization under the theme "Changing the Way We Live and Protecting the Earth: The Pursuit and Practice of a New Principle of Civilization that Promotes Life". While this included highly abstract arguments and the way traditional viewpoints about religious doctrine should adapt to changing circumstances, there was also a call for people from religious groups to bring forth a new master narrative for our world and civilization. In this way, a new phase in the history of this symposium was initiated.

Program Summary

Welcome from the Sponsors

Dr. Makio Takemura, the President of Toyo University and the Head Representative of RSE, opened the program by explaining the mission of RSE, while speaking about the continually worsening environmental problem as the one grave mission of people from religious organizations. In this way, he emphasized the significance of holding this symposium at Mt. Koya, which has a long history of looking deeply into the source of life. Dr. Takemura also called for even greater support for the activities of RSE in providing education about environmental conservation and concrete resolutions to the energy crisis.

Welcome from the Hosts

The President of Koyasan University, Rev. Kokan Fujita, spoke about the way the teachings of the Shingon denomination's founder, Kobo Daishi (Kukai), have acted as a guide for some 1200 years in understanding the importance of life and how the university has sought to realize these values. Rev. Fujita then gave words of welcome expressing his hope that the participants would enjoy their experience on the campus, which is surrounded by an environment of unsurpassed nature and deep history.

Keynote Speech: The Environmental Problem from a Buddhist Standpoint

His Holiness Yukei Matsunaga—Chief Priest of Kongobu-ji, the Head Temple of the Shingon Koyasan denomination—presented an inquiry that dug deep into the interpretations of sentient life advanced by the great Buddhist predecessors in Japan, China, and India. He first broke down into different cultural fields leading conceptions or views of life that come from an interpretation that distinguishes between sentient and

non-sentient life, according to the traditional theory of buddha-nature. Then, he described the difference with Shingon's esoteric suppositions about life from its distinctive worldview of the "six elements with no obstruction" (*rokudai-muge*), in which sentient and non-sentient existence are perfectly blended giving rise to the idea that the grass, trees, and land also have buddha-nature. Making further references, Rev. Matsunaga noted that there are numerous interpretations in Japanese culture in which form or matter (*mono*) and life (*inochi*) are bound together, indicating that in the Japanese concept of divinity "life exists in all things (*mono*)". In conclusion, Rev. Matsunaga stated that Buddhism incorporates the ethics of moderation and contentment in the commonly used teaching of *shoyoku-chisoku* (少欲知足, Pali. *santuthi*) and that we should put to use the mind of altruism found in the teaching of "the greed or desire for purity" (*taiyoku shojo*) for the purification of the environment.

Panel Presentation #1: The Thing Only People from Religious Groups Can Do in Resolving the Root Problems of the Global Environment

Rev. Yuchi Kitagawa, the Abbot of Koke-ji Temple of the Shingon Koya Denomination, also serves as an official environmental consultant for the Japanese Ministry of Environment. He explained how he first entered the path of environmental activism after his experience volunteering in reconstruction aid after the Great Hanshin Earthquake of 1995. However, during this work he experienced set backs and a kind of breakdown. As a means to regain his footing, he began to research into how the environment was dealt with in the Edo Period (1603-1868). In this way, he spoke about the need to revive religious services based around the five seasons to which esoteric Buddhism was originally connected. He then shed light on the worldview at this time based on gratitude, prayer, and the internalization of the environment in which the people valued a sense of the seasons and calendar. This worldview was centered on a sentiment that respected the cyclical nature of the environment. Rev. Kitagawa also explained that Mt. Koya has an ancient history that still preserves traditional construction methods, like using cypress bark for roofing, and has been an embodiment of the kind of work of a forestry department.

Panel Presentation #2: The Role of Religion Seen from the Viewpoint of Civilizational Theory: Environmental Culture and Narrative

Dr. Katsuhiro Kohara, Professor of Theology at Doshisha University in Kyoto, speaking within the confines of contemporary post-modern thought, addressed the contributions religion can make to resolving the environmental problem. Within this discussion, he pointed out how religious persons must create a cooperative "master narrative" that does not get bogged down in the differences between various religions. In this way, he presented two theses: The first concerned the inherent role of religions to continually articulate a narrative that stimulates the inherent nature of society, thus creating an environmental culture. The second thesis concerned the role of Japanese religion in creating a civilizational viewpoint that forms a narrative which can stand up against the grand narrative of globalization.

Panel Presentation #3: The Crisis of Life and Its Revival: A Reconsideration of the Sense of the Reverence of Life in the 21st Century

Dr. Akira Kaneko, a professor at Tenri University and its affiliated research institute, spoke about how to examine and make effective use in the 21st century of Albert Sweitzer's sense of the reverence of life. He also focused on Sweitzer's expression of fulfilling one's own life by devoting or sacrificing for the lives of others, pointing out how this sentiment also underlies the way of thinking in Rev. Matsunaga's talk about "the desire for purity" (*taiyoku shojo*). He further explained that if the sense of responsibility in the individual natures of people in this era can be expanded, then it can lead towards a sense of inter-generational responsibility that is spacious and timely. Further, the position of placing importance on material development and present prosperity can switch, and a civilization that is rooted in the inherent value of natural life itself can ripen. In terms of the sense of the individual and the responsibility towards life that is right before our eyes, Dr. Kaneko introduced the the following words of Sweitzer: "As much as we might have deep conflicts, we are all truly in the midst of truth … The thing one calls a good heart which feels no guilt is an illusion of the devil."

Panel Discussion

Dr. Michiya Murata, professor in the International Communications Department at Hannan University in Osaka, acted as the moderator for the panel discussion and began by speaking on the conference theme of "The Pursuit and Practice of a New Principle of Civilization that Promotes Life".

In responding to questions that came from the floor, there developed a discussion about the low level of concern in Japan of the environmental problem as compared to the history of environmental conservation in Western Europe. Dr. Katsuhiro Kohara pointed out that environmental protection groups were established in Western Europe from the 19th century onward from both religious and secular standpoints; and that the movement has placed great importance on the values of the inherent beauty of nature and the existence of nature itself as well as doctrine of stewardship for all living creation. In terms of contemporary Japan, Dr. Kohara pointed out that the culture that discovers joy in the service of others has faded out; and that the low level of engagement in the environmental problem is connected with the low level of concern for social issues and events.

In response to the necessity of nuclear energy promoted by the Japanese government, all the participants clearly had a negative opinion. Simply, people from religious groups should in common accord voice their opposition and indicate their intention of "NO". However, there is concern that further efforts to consider such action have been given up by religious groups. The opinion was expressed that in relating to wider society, people from religious groups should continually push for reflection on environmental issues. There was also a question concerning the Islamic sense of the environment, and Dr. Kohara reported that there is an official view (*fatwa*) among Islamic scholars that nuclear energy is evil.

On the issue of reviving the concepts of deep ecology in contemporary society, Rev. Kitagawa argued that there is a need for a joyous sensitivity towards living things in nature and that in order to foster this sensitivity, we should revive the rituals of both Buddhist temples and Shinto shrines which revolved around the traditional Japanese calendar.

Dr. Kaneko again raised Albert Sweitzer and his understanding of the environment. With a reverence for life as a basis, Sweitzer tied together the sense of love with the existence of all life in the natural world. In terms of Christian thinkers, this is an exceptional example, which is similar to that of St. Francis of Assisi.

Finally, there was a call for comments about the conference declaration that had been given out to participants. Dr. Kohara felt that in terms of the ways to regulate greed, the section talking about promoting the advance of scientific and technological solutions should be taken out and that religions must consider ways of behaving that will connect humans and nature. Dr. Kaneko also felt the regulation of greed is important, but there is also the need to transform the values of greed. This requires connecting the "desire for purity" (*taiyoku shojo*) completely with one's life and self-sacrifice for others, which creates the spread of a transcendental desire. Rev. Kitagawa expressed the need to devise a complete lifestyle shift or transformation that promotes an organic shift in society as well as promoting individual awakening one by one among parishioners by those in charge of their associations. Dr. Murata felt the thing that religious persons need to aim for is to not only develop faith principles and lifestyles that do not exclude people of different faiths and backgrounds but to also create sustainable societies that transcend generation gaps.

Closing Remarks

Dr. Ryoichi Yamamoto, Professor Emeritus of Tokyo University and Vice Representative of RSE, was one of the people who proposed making an environmental declaration at this time. In this way, he explained about the reality of climate change in recent years. He explained that on the basis of the results of enormous amounts of data on weather made available from satellites, we can see a point of no return in the next ten years. Human activities in mining and agriculture will exceed the physical limits of the earth, and as a result, the rise in temperatures at the North and South Poles will go beyond reversing, followed by a mass extinction of sentient life. Therefore, a policy to resolve this situation must drastically reduce carbon dioxide emissions and overcome the sabotage and resistance to this information found in all parts of the world. In order to achieve this, there needs to be the immediate establishment of a panel within the United Nations of religious, philosophical, and intellectual leaders form various fields to offer their opinions on the environment. Prof.

Yamamoto closed the conference by calling on those in attendance to endorse the proposed declaration of the conference and asked for their cooperation in creating this religious panel at the UN.

Report by Hiroki Ogasawara, Coordinator of RSE
Translation by Jonathan Watts

宗教・研究者エコイニシアティブ 事務局
〒252-0232 相模原市中央区矢部 3-9-5-302
℡ 042-707-1440 / 070-6444-3700